

クロスロード

3



特集1

理科教育分野の活動ポイント

特集2

“専門外”への対応法



現在の派遣国数

76 カ国



JICA海外協力隊 派遣現況

(2020年1月末現在、単位：人)

■ アフリカ地域

国名	JV	SV
ウガンダ	46	2
エスワティニ	2	
エチオピア	22	
ガーナ	62	2
ガボン	22	3
カメルーン	28	2
ケニア	44	4
ザンビア	61	9
ジブチ	14	
ジンバブエ	8	
セネガル	41	1
タンザニア	63	3
ナミビア	16	
ベナン	45	
ボツワナ	21	
マダガスカル	35	
マラウイ	34	
南アフリカ共和国	6	4
モザンビーク	35	1
ルワンダ	44	
レソト	1	

■ アジア地域

国名	JV	SV
インド	20	
インドネシア	11	2
ウズベキスタン	23	5
カンボジア	21	2
キルギス	32	1
タイ	23	4
タジキスタン		2
中華人民共和国	11	
ネパール	45	5
東ティモール	37	
フィリピン	34	2
ブータン	15	4
ベトナム	34	12
マレーシア	18	6
ミャンマー	19	4
モルディブ	12	
モンゴル	43	
ラオス	40	

■ 大洋州地域

国名	JV	SV
キリバス	4	
サモア	17	1
ソロモン	25	2
トンガ	17	1
バヌアツ	29	4
パプアニューギニア	30	4
パラオ	11	8
フィジー	24	3
マーシャル	8	3
ミクロネシア	16	6

■ 欧州地域

国名	JV	SV
セルビア	6	2

■ 中東地域

国名	JV	SV
エジプト	21	2
チュニジア	6	
モロッコ	20	3
ヨルダン	39	1

■ 中南米地域

国名	JV	SV	日系JV	日系SV
アルゼンチン		14	6	5
ウルグアイ		3		
エクアドル	40	3		
エルサルバドル	15			
キューバ		1		
グアテマラ	24	1		
コスタリカ	30	7		
コロンビア	15	10		
ジャマイカ	22	6		
セントビンセント	3			
セントルシア	10			
チリ		1		
ドミニカ共和国	27	2	6	2
ニカラグア	2			
パナマ	17	2		
パラグアイ	38	2	8	3
ブラジル			75	14
ベリーズ	15			
ペルー	37	7		
ボリビア	40		1	1
ホンジュラス	23			
メキシコ	2	6		

■ 合計

	JV	SV	日系JV	日系SV	小計
派遣中 (男性/女性)	1,721 (724/997)	185 (142/43)	96 (38/58)	25 (10/15)	2,027 (914/1,113)
累計 (男性/女性)	45,648 (24,210/21,438)	6,553 (5,298/1,255)	1,528 (584/944)	547 (252/295)	54,276 (30,344/23,932)

JV = 青年海外協力隊/海外協力隊

SV = シニア海外協力隊

日系JV = 日系社会青年海外協力隊/日系社会海外協力隊

日系SV = 日系社会シニア海外協力隊

クロスロード

2020 MAR
Contents

■職種別索引	掲載ページ
コミュニティ開発	16
電気・電子機器	24
自動車整備	26
経営管理	20
品質管理・生産性向上	25
青少年活動	4、18、22
陸上競技	35
野球	4
理科教育	6、8、10、28
理学療法士	14
公衆衛生	36

■国別索引	掲載ページ
アルゼンチン	20
ケニア	18
ザンビア	6
スリランカ	24
タンザニア	26
パラオ	35
東ティモール	36
フィジー	25
ベナン	16
ペルー	22
マレーシア	4
モザンビーク	4
モンゴル	8
ヨルダン	14
ラオス	10

■出身都道府県別索引	掲載ページ
千葉県	14
東京都	10
新潟県	36
神奈川県	18、26
静岡県	16、24
愛知県	35
滋賀県	25
京都府	6
山口県	20
福岡県	8、22

【凡例】

- ① JICA海外協力隊の方々（経験者を含む）については、次のように表記しています。

国際協子さん（ウガンダ・青少年活動・2019年度3次隊）

氏名	派遣国	職種	隊次
----	-----	----	----

※「青年海外協力隊」以外のJICA海外協力隊（「シニア海外協力隊」「日系社会青年海外協力隊」「日系社会シニア海外協力隊」）の方々、括弧内の冒頭に「SV」「日系JV」「日系SV」と記しています。

- ② JICAの「企画調査員（ボランティア事業）」については、「VC」と表記しています。

本誌は、JICA海外協力隊が現地での活動・生活を円滑に行うための実践的な情報、および帰国後の進路開拓や社会還元に関する有益な情報を提供し、対象者に配布しています。

ロゴタイプデザイン：(株) AND

レイアウト：(株) AND

印刷・製本：弘報印刷(株)

4

JICA Volunteers' NEWS

- ▶環境に対する意識向上を狙い、学校美化のための壁画を制作（モザンビーク）
- ▶ジャイアンツアカデミーの協力を得て、マレーシア初の野球クリニックを開催（マレーシア）

特集1

理科教育分野の活動ポイント

6

CASE 1 中等学校配属

市川志野さん（ザンビア・理科教育・2017年度1次隊）

8

CASE 2 教育行政機関配属

福島未希さん（モンゴル・理科教育・2017年度2次隊）

10

CASE 3 教員養成校配属

田口耕平さん（ラオス・理科教育・2017年度1次隊）

12

活動Q&A集

特集2

“専門外”への対応法

14

CASE 1 助っ人＝協力隊員

古宮将太さん（ヨルダン・理学療法士・2017年度2次隊）

16

CASE 2 助っ人＝現地の人

平尾莉夏さん（ベナン・コミュニティ開発・2017年度1次隊）

18

CASE 3 助っ人＝ウェブ

鈴木まほろさん（ケニア・青少年活動・2017年度2次隊）

20

CASE 4 助っ人＝日本の知人

山本康博さん（SV／アルゼンチン・経営管理・2017年度2次隊）

22

“失敗”から学ぶ

岩瀬さくらさん（ペルー・青少年活動・2017年度2次隊）

24

希少職種図鑑

▶電気・電子機器 水野勝二さん（SV／スリランカ・2016年度2次隊）

▶品質管理・生産性向上 卯田洋介さん（フィジー・2017年度3次隊）

26

JICA Volunteer's Before ▶ After ～人生を変えた2年間～

国際NGOで車両整備など 川内勇希さん（タンザニア・自動車整備・2015年度1次隊）

28

OB・OG匿名座談会

理科教育分野篇

30

JICA海外協力隊のプチテクガイド

スマートフォンで動画づくり／廃材でキノコ栽培／あるもので日本の味

32

INFORMATION

34

JICA海外協力隊のつぶやき

お題：「現地化」

35

協力隊@TOKYO 2020



落成式の様子。参加者に壁画の説明をする東さん（左から2人目）

落成式までの流れ	
〈2カ月前〉 壁画企画 スタート	瓶のふたを生徒とともに集め始める。壁画のためのデザインを生徒から募集。デザイン案の作成。
〈1カ月前〉 壁画作成	瓶のふたを使った学校名の看板作成。(3日ほどで完成) また壁画もモルタル塗装から始め、下塗り、色塗りなど10日で完成。
〈2週間前〉 落成式準備	落成式に向けて備品の準備やプログラムの作成などを行い始める。
〈前日〉 準備完了	当日の流れの確認などを校長やMCと行う。
〈当日〉 開催	壁画の落成式と日本文化紹介イベントの開催。

環境に対する意識向上を狙い 学校美化のための壁画を制作

文 = 東 知恵里さん(モザンビーク・青少年活動・2017年度3次隊)

Mozambique

私が配属されたのはモザンビークの首都マプトにある、日本の支援によって建てられた中学校でした。日々の活動は、美術の授業や美術部、手芸部といった課外活動の指導です。

活動をするなかで気になったのは、校庭に落ちていくゴミや教室の壁の落書きの多さや、平気でゴミのポイ捨てをする子どもたち。同国ではまだまだ環境に対する意識がとても低く、道の至るところにゴミが落ちています。そこで、子どもたちにゴミ問題について考えてもらうきっかけとして行ったのが、学校の外壁に瓶のふたを使って学校名の看板を作成することでした。

生徒と一緒に瓶のふたを集め、セメントを使って壁に貼りつけ、学校名をつくっていきました。同時に、学校内の別の壁(約20メートル)にも生徒たちとともに壁画を作成。身近な存在である学校という生活環境の中にアートを取り入れることで、生徒



瓶のふたで学校の名前をつくる生徒たち

たちが「自分たちの学校をもっときれいにしよう」と思う契機になればという狙いがありました。

生徒たちは今までみんなでひとつのものを制作するという経験がなく、同国は絵の具を使う授業もほとんどありません。そんななか「僕も」「私も」と多くの生徒に積極的に参加してもらえ、完成時にはみんな嬉々合いました。

完成後、活動の集大成として壁画の落成式を開催し、同時に日本の文化紹介も行うことにしました。大変だったのは当日までの準備。プログラムの作成や備品の準備などやるべきことが山積みでした。しかし、他隊員の手助けもあり、浴衣体験や折り染め体験、居合、また環境教育としてリサイクル炭のデモンストラーションなどを盛り込むことができ、当日は多くの教員や生徒が集合。参加者はみな興味津々で、特に浴衣の着付け体験は大人たちもこぞって参加し、イベントは大成功でした。

今回、壁画の活動や落成式の準備をとおして、いろいろな教員と「もっとうつしたら学校がよくなるのではないか」「こうしたら学校にいい空間をつくるのができるのではないか」と話をするのができました。生徒の意識を変えることを目的としていましたが、教員にも変化を感じることができたのは、とても嬉しいことでした。私はこの1月で任期を終えましたが、今後現地の教員が美化活動に力を入れ、生徒とともに学校を素敵な空間にしていってくれることを期待しています。

5日間の野球クリニックの概要	
1日目	【対象】男子ナショナルチーム+地域の学生(20人) 【内容】基礎練習→実践練習 走者への牽制、カバリングなど実践的なアドバイス
2日目	【対象】大学女子ソフトボール部(20人) 【内容】基礎練習→ゲーム要素を取り入れた捕球練習やバッティング練習
3日目	【対象】小学生(50人)+中学生(50人) 【内容】基礎練習→ゴムボールを使用したミニゲーム(初心者でも安全に楽しむことのできる野球教室)
4日目	【対象】大学生未経験者(50人) 【内容】基礎練習→バッティング練習→ホームラン競争
5日目	【対象】大学野球部(20人) 【内容】基礎練習→実践練習→成瀬コーチとの対戦



小・中学生に向けた野球教室で捕球姿勢の指導をするジャイアンツアカデミーの成瀬氏

ジャイアンツアカデミーの協力を得て マレーシア初の野球クリニックを開催

文 = 上戸翔太さん(マレーシア・野球・2018年度2次隊)

Malaysia

私は、マレーシア国立ブトラ大学で、大学野球チームの指導、日本遠征、リーグ戦の企画運営、MLB野球教室、地域の小学生を対象にした野球教室の開催、ナショナルチームの技術指導などを行っています。

同国ではソフトボールが盛んな一方、野球はマイナースポーツです。現役を終えた元ソフトボール選手が次の活躍の場を求め、野球を始めるパターンが定着しており、マレーシア代表選手(男子)の平均年齢は34歳と、高齢化が進んでいます。この現状を打破するべく、子どもたちへの野球普及活動を積極的に行っています。その一環として、2019年11月16日から5日間に渡り『ジャイアンツアカデミー』の指導者・成瀬功亮氏と共に「マレーシア国立ブトラ大学において、マレーシア代表選手をはじめ小学生や大学野球部を対象にした野球クリニックを開催しました。

開催において特に苦労したのは、代表選



上戸さん(最前列、白色帽子)と配属先の大学野球部員。選手は全18人

手の招集です。選手の多くは家庭を持ち、働きながら野球をしています。開催3カ月前からJICAマレーシア事務所と大学のスタッフで会議を重ね準備しましたが、前日になり、選手の休暇取得に必要な文書が大学スタッフから出されていないことが発覚し、選手を招集できない残念な事態に。コーチと連携を取り、なんとか選手10人に参加してもらうことができました。

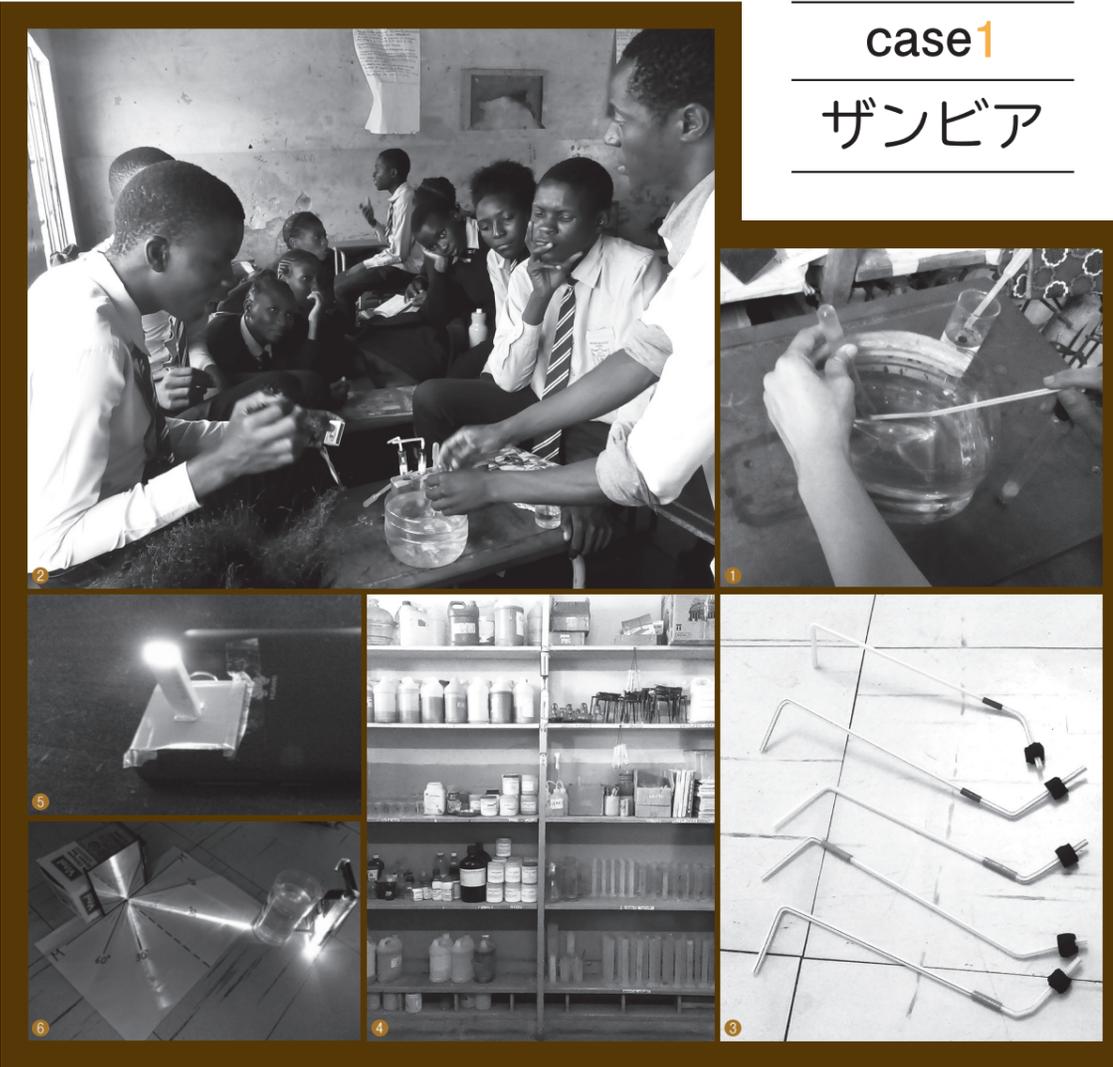
野球クリニックの3日目は小・中学生合計100人に野球教室を実施し、子どもたちは野球を心から楽しみ、野球に興味をもってくれました。子どもたちから「野球をやりたい」と聞いた先生たちが配属先に連絡してくるようになり、今では毎週多くの子どもたちが野球教室へ来てくれます。また今回の開催は、競技経験者にとっても専門的技術を学べる良い機会になりました。昨年までプロ野球選手だったコーチとのバッティング対決では、選手たちが日本の高い技術に驚いていました。

今後は野球の普及活動に加え、指導者育成にも注力する予定で、現在誰でも野球を教えることができる簡単な教本を作成中です。また、同国には大学野球部のほかに7つのクラブチームが存在しますが、定期的に練習成果を発揮できる場所(試合)が少ないという課題があります。この解決のため、半年に1回のリーグ戦を計画中で、定期的な実施は選手のモチベーション向上やメディアをおとした野球認知度向上にもつながると期待しています。それらの実現へ向けて一歩ずつ歩みを進めています。

※ジャイアンツアカデミーは、株式会社読売巨人軍が開校する、プロ球団が子どもたちに野球を指導する野球スクール。読売巨人軍とJICAは、2015年に野球普及・振興のためのJICAボランティア事業に関する業務協力協定(MOU)を締結し、毎年、野球指導の分野で派遣されているJICA海外協力隊の任地で、野球の普及活動を目的とした野球クリニックを開催している。

理科教育分野の活動では、「器具や材料の不足」や「同僚教員の知識不足」といった要因で「観察・実験の充実化」の働きかけが思うように進まないケースも少なくないだろう。そうしたなかで協力隊員が果たし得る役割は何か？ 活動事例をとおしてポイントを整理する。

case1
ザンビア



①②③第8学年の生徒を対象とする研究授業で市川さんが行った水素を集める実験。ガラス管の代わりにストローを、試験管の栓にはピーチサンダルの切れ端を使った(③) ④観察・実験の器具や材料を「種類」や「使う頻度」により整頓するという市川さんの提案により改善された理科準備室の棚 ⑤⑥自作の光源装置。光を絞り込む筒をスマホにつけ(⑤)、その光をビーカーの水に当てて屈折させることで光線をつくった(⑥)

「語学力」と「生徒間の学力差」という2つの困難に対処

中等学校に配属され、生物と総合理科の授業を担当した市川さん。当初、「語学力」の壁に苦労したが、「生徒から生徒に説明させる」といった方法により対応していった。

中等学校配属

市川志野さん

Ichikawa Shino

(ザンビア・理科教育・2017年度1次隊)

市川さんの配属先は、日本の中学2年生から高校3年生にあたる学年(第8学年から第12学年)で構成される中等学校。年度により入学を受け入れる生徒の人数に幅があり、60〜70人のクラスが各学年に2〜6ずつあった。着任当初から任されたのは、第10学年の1つのクラスで生物の授業を行うこと。着任の半年後には、第8学年の「総合理科」の授業も担当するようになった。「総合理科」とは、物理・化学・生物の初歩をまんべんなく教える科目だ。

理科を担当していた同僚教員は5人。配属先では毎授業の前に「授業案」を作成し、学校に提出することが教員たちに義務付けられており、彼らは多忙を極めていた。そのため、理科教員たちの授業には「観察・実験が少ない」という課題が見られたものの、その解決に向けた研修などに付き合ってもらうのは難しく、市川さんの活動は一教員として授業をこなすことがメインとなった。

「語学力の壁」への対処

生物の授業を行ううえで市川さんが直面したのは「語学力の壁」だ。計算」が重要な学習内容である物理や化学に比べ、生物は「暗記」が中心の科目。「細胞の各構成要素の働き」など、いくつもの複雑な事柄を生徒たちに理解させていかなければならない。ところが、着任当初は市川さん自身が英語による授業に不慣れだった

うえ、英語が不得意な生徒もおり、言葉による説明で複雑な事柄を伝えるのは至難の技だった。

市川さんがとった対策のひとつは、図などの視覚教材の多用である。例えば、「細胞」についての学習は複数回の授業にわたるため、その都度板書をする必要がないよう、細胞の構成要素などの絵は模造紙に描き、使い回せるようにした。

「語学力の壁」に対して市川さんがとったもうひとつの対策は、「できる生徒に説明を委ねる」という方法の導入だ。生徒たちの学力は差が大きく、市川さんが視覚教材を駆使しながら説明をしても、なかなか理解してもらえない生徒も少なくなかった。しかし、さらなるわかりやすい説明は市川さんの語学力では難しい。そこで、市川さんの説明で理解でき

観察・実験の積極的な導入

「生徒たちの間の学力差が大きい」という状況については、「観察・実験を多く取り入れる」という対策も

有効だった。「できない生徒」は、座学の授業では集中力がすぐに途絶えてしまうが、観察・実験には興味津々に取り組んだからだ。特に顕著だったのは、8年生の「総合理科」の授業で行った化学の実験。たとえば、水素でつくったシャボン玉が上昇していく様子を見て、生徒たちは「先生はマジシャンですか!」などと歓声をあげるのだった。

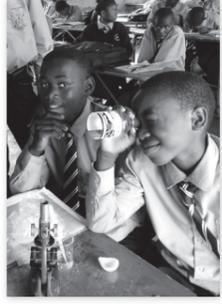
同僚教員たちへの働きかけ

観察・実験について、市川さんは同僚の理科教員たちにも積極的に授業に取り入れてもらえるよう、働きかけてみたが、苦戦した。ザンビアの理科の教科書には観察・実験の記載があったものの、同僚たちは実践経験が少ないため、国家試験で定番として出題される観察・実験にしか手を出そうとしないことがほとんどだった。市川さんは、準備に手間のかからない観察・実験に絞って紹介するよう努めた。口に風船を付けたフラスコを加熱し、温度による空気の膨張を確認する実験などだ。しかし、同僚たちには取り入れてはもらえない。市川さんが紹介する観察・実験に興味を示すのは、配属先が受け入れていた教育実習生ばかりという状態だった。

それでも、任期の最終盤には変化のきざしが見られた。毎年その時期には、配属先で「研究授業」が行われることになっていたが、その年は引き受け手がなく、市川さんが教壇に立つ役を担当。8年生のクラスを対象に、水素を発生させ、その性質を調べる実験を行った。実施前、同僚から

「大学レベルの実験だ」といった批判の声もあった。しかし、市川さんは普段の授業でこのレベルの実験は生徒たちの力量を超えていないと確信していたことから、敢行。すると、生徒たちが意欲的にその実験に取り組み、やり遂げた。その姿を見たことで、市川さんの研究授業を見学した同僚たちの考えも変化。それまで市川さんが紹介する観察・実験に興味を示さなかった同僚までもが、「やり方を教えてほしい」とリクエストしてくるようになったのだ。

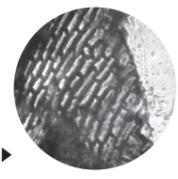
「顕微鏡」のつくり方



- 【用意するもの】
- ・ペットボトル
 - ・透明のビーズやガラス
 - ・セロテープ
 - ・植物の葉

【実験道具】

- 1 ペットボトルの蓋に穴を開ける。
- 2 開けた穴に、3ミリくらいの透明のビーズをはめる。
- 3 植物の葉の薄皮を剥がす。
- 4 剥がした薄皮をセロテープで両面から貼る。
- 5 ④をペットボトルの口の所に置く。
- 6 ②でペットボトルの口を閉める。
- 7 蓋から覗くと、ビーズの屈折で植物の葉が拡大されて見える。



手づくりの顕微鏡で見た葉の細胞▶

「顕微鏡」のつくり方

有効だった。「できない生徒」は、座学の授業では集中力がすぐに途絶えてしまうが、観察・実験には興味津々に取り組んだからだ。特に顕著だったのは、8年生の「総合理科」の授業で行った化学の実験。たとえば、水素でつくったシャボン玉が上昇していく様子を見て、生徒たちは「先生はマジシャンですか!」などと歓声をあげるのだった。

観察・実験について、市川さんは同僚の理科教員たちにも積極的に授業に取り入れてもらえるよう、働きかけてみたが、苦戦した。ザンビアの理科の教科書には観察・実験の記載があったものの、同僚たちは実践経験が少ないため、国家試験で定番として出題される観察・実験にしか手を出そうとしないことがほとんどだった。市川さんは、準備に手間のかからない観察・実験に絞って紹介するよう努めた。口に風船を付けたフラスコを加熱し、温度による空気の膨張を確認する実験などだ。しかし、同僚たちには取り入れてはもらえない。市川さんが紹介する観察・実験に興味を示すのは、配属先が受け入れていた教育実習生ばかりという状態だった。

#私が感じた協力隊の強み

「現場」に深く入り込んで活動できる点



PROFILE

1981年生まれ、京都府出身。大学の理学部で学んだ後、理科教員として中学校に8年間勤務。その間、JICA教師海外研修でザンビアを訪問。2017年7月、協力隊員として同国に赴任(現職教員特別参加制度)。19年3月に帰国し、復職。

活動概要

ブロードウェイ中等学校(中央州カブ工部カブ工)に配属され、理科教育に関する主に以下の活動に従事。

- 授業の実施
- 現地で入手可能な物でできる観察・実験の器具の開発
- 理科準備室の整備

case2
モンゴル

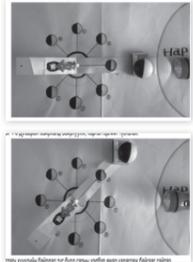
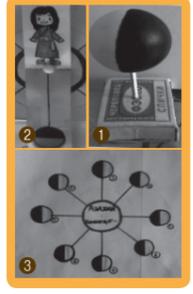
“月の実験”

【用意するもの】
・マーカー（黒、黄、青）
・懐中電灯等・卓球ボール
・マッチ箱とマッチ棒
・紙
・ピン

【実験道具】※右掲の写真

- 1 マッチ箱とマッチ棒、卓球ボールでつくる「月」
- 2 「人」と「月」の図
- 3 「地球」と「公転する月」の図

【実験手順】
(1) ②の中心と③の中心をピンで固定する。
(2) 懐中電灯で「太陽の光」を表現し、①を③の8つの「公転する月」の位置に移動させながら、それぞれの「月」の見え方を観察する。

とする次のような活動スタイルを固めたのは、着任の約半年後のことである。

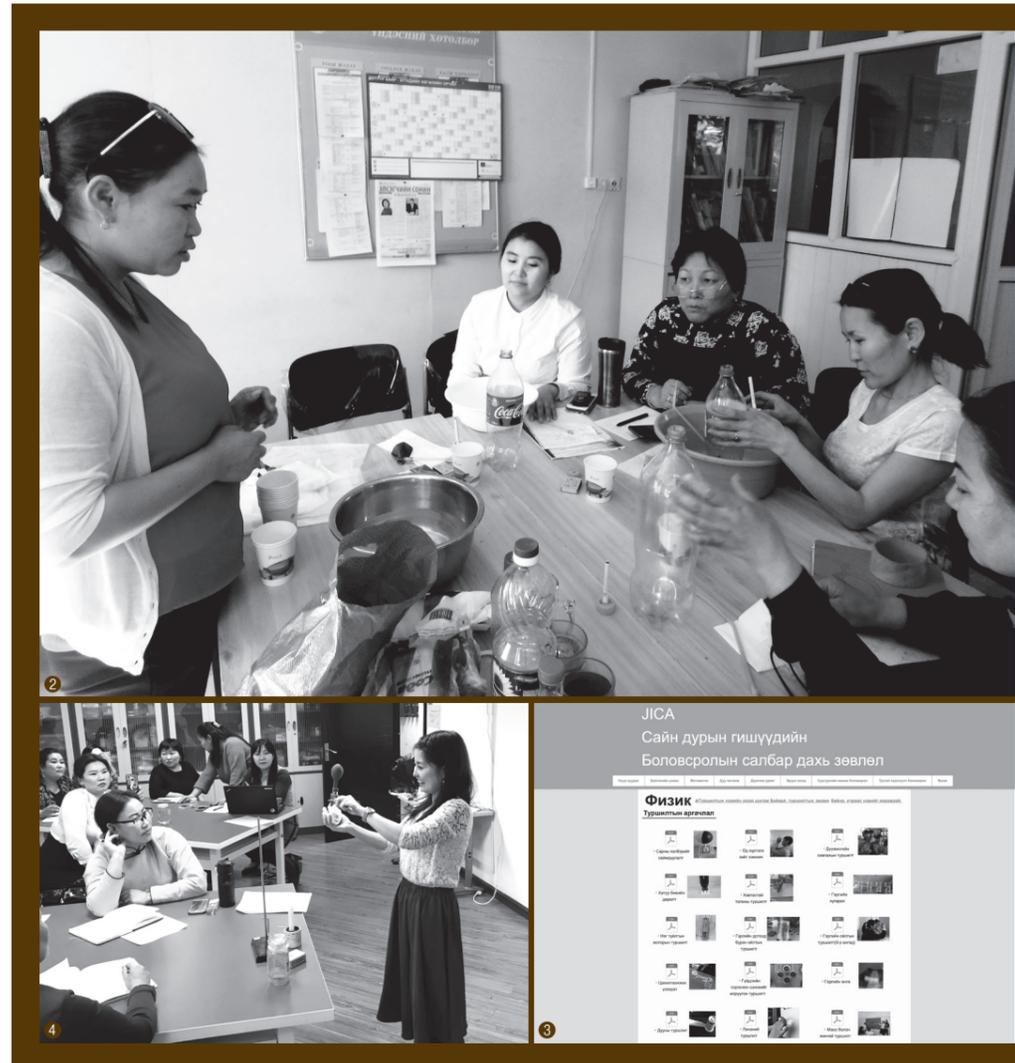
① 県内の中高一貫校5校を巡回し、理科教員とともに観察・実験の授業を行う。彼らとは事前にならずアイデアの相談、計画書にあたる「観察・実験書」の執筆、予行練習を行う。

② 配属先で毎月1回、県内の中高一貫校から理科教員を集めてセミナーを開き、巡回先の教員たちに実際に行った観察・実験を紹介してもらう。

③ セミナーの受講者には、学んだ観察・実験をそれぞれの配属校でほかの理科教員たちに紹介してもらう。

どの材料は一切なく、教員が自腹で調達しなければならぬ状態だった。一方、現地教員たちは理科に関する知識は豊富だったが、「応用力」に欠けていた。観察・実験の器具や材料が足りないときに、現地で手に入る代用品を考えることが苦手だったのだ。

そうしたなか、福島さんは巡回先の教員たちと観察・実験を行う際、計画の骨格は提供したが、それを現地で手に入る物でどう実現するかは、極力彼ら自身で考えてもらうよう心がけた。すると、「光の屈折」の実験でピーカーの代わりに透明なプラスチックのコップを使うなど、現地のスーパーで安価に手に入るような代用品を進んで考えるようになっていった。



①「タバコの害」を理解するための実験に取り組む巡回先の中学生たち。ペットボトルの蓋に穴を開けてタバコを差し、ペットボトル内に煙を充満させた後、蓋を取って紙を当てて煙による着色の様子を観察するものだ ②福島さんが配属先で行ったセミナーの受講者（左端）が、一緒に行った実験を他の学校の教員に紹介する様子 ③福島さんたちが立ち上げたダウンロードサイトの「物理」のページ <https://mongoledbagsh.wixsite.com/mysite-1> ④ダウンロードサイトのPRを目的に首都で開いたセミナーで、実験書をサイトに公開している実験を紹介する福島さん（右）

課題は教員間の「情報の共有」

福島さんが現地教員とともに観察・実験を行うようになってすぐに感じたのは、彼らに「教員間で情報を共有し、ともに成長する」という意識が薄いことだ。巡回先で現地教員とともに観察・実験を行っても、そこで伝えた知識やアイデアがほかの教員に広がっていかないのだった。そうした状況への対策のひとつとして、①が、前述の②と③のステップ。もうひとつが、①で「観察・実験書」の執筆を必須としたことだ。「記録」に残し、それを拡散することで、観察・実験の知識やアイデアの共有が進むと考えたのだった。

最初に試みた拡散の方法はFacebook。現地の人たちがもつともよく利用しているSNSだった。物理、化学、生物のそれぞれについて県内の担当教員をメンバーとするFacebookグループを設け、現地教員とともに「観察・実験書」のPDFを投稿していった。

しかし、投稿数が増えるに従って利用しづらさが顕著になっていく。投稿された観察・実験書がひと目でわかるリストを表示することができないという問題だ。現地教員たちにアンケートをとると、「本」や「ダウンロードサイト」での拡散を希望する声が多かったが、前者は費用がかかる。そこで福島さんが探り始めたのは、後者で公開する道である。

モンゴルでは当時、福島さん以外

にも理科教育隊員が活動していた。彼らと相談した結果、それぞれが現地の教員とともに作成した観察・実験書をアップロードし、現地教員たちに自由にダウンロードしてもらえ、モンゴル語のウェブサイトを用意することとなる。コンピュータ技術隊員の協力を得て、無料で作成・維持できるサイトを立ち上げることができたのは、着任して1年ほど経ったころ。観察・実験書をアップロードする作業は隊員たちが担当。やがて、モンゴル全土の理科教員たちが利用するサイトとなっていった。

観察・実験書の執筆について、当初は現地教員たちが積極的に取り組んでもらうことが難しかった。「手間だ」と渋る教員が少なくなかった。土台は福島さんが執筆し、その手直しだけをしてもらう、あるいは配属先から執筆を呼びかけてもらう、といった方法も試してみた。しかし、たいした効果は見られなかった。

そうしたなか、現地教員たちの姿勢が変わるきっかけとなったのが、Facebookやサイトでの公開だ。アップロードする観察・実験書には、それを書いた教員の名前を明記。すると、自分の実績が形として残り、かつモンゴル全土の教員たちにそれが知れ渡ることが、彼らの自尊心につながり、観察・実験書の執筆への意欲が高まっていったのだ。

アップロードされる観察・実験書の数が増えれば、それに伴ってサイトの閲覧者も増加する。するとまず

観察・実験書のダウンロードサイトを設け、教員間の情報共有を促進

中高一貫校を巡回し、理科教育の質向上の支援に取り組んだ福島さん。現地の教員たちに「知識やアイデアを共有する」という意識が欠けていたなか、彼らの観察・実験書を集約・公開するダウンロードサイトを立ち上げた。

教育行政機関配属

福島未希さん

Fukushima Miki

(モンゴル・理科教育・2017年度2次隊)

「巡回」「セミナー」の二本柱

ようやく活動の方向性が見えるようになってきたのは、着任して3カ月ほど経ったころからだ。きっかけのひとつは、教育・文化局長からの依頼で実施したセミナーである。県内の中高一貫校で物理を担当している教員を対象に、実験の紹介を行った。受講者からは「自分の学校で手本となる授業をやってほしい」といったリクエストが寄せられ、観察・実験に対する現地教員たちの関心の高さが確認できた。

活動の方向性を見出すもうひとつのきっかけとなったのは、当時通っていた学校の中学生を対象に行ったアンケート。「観察・実験をしてほしい」という要望が多かった。そうして、観察・実験の紹介を軸

まず現地教員たちの執筆意欲は高まり、アップロード数の増加が加速する。そんな良いサイクルが生まれ、福島さんの任期が終わる時点で、アップロードされた観察・実験書は100を超え、サイトの閲覧者は1200人にのぼった。

このサイトはその後、小学校教育隊員や障害児・者支援隊員などモンゴルの理科教育以外の隊員が現地の関係者に向けた資料を公開するページも増設。モンゴルの全隊員が協力して運営する体制となった。

#私が感じた協力隊の強み

「フレキシブル」に動ける点



PROFILE
1984年生まれ、福岡県出身。大学卒業後、AICJ中学・高等学校に理科教員として勤務。2017年10月に協力隊員としてモンゴルに赴任（現職参加）。19年6月に帰国し、復職。

活動概要
ドンドゴビ県教育・文化局（ドンドゴビ県マンダラゴビ市）に配属され、理科教育に関する主に以下の活動に従事。
●授業の実施（現地教員との協働）
●観察・実験書の作成（現地教員との協働）
●現地教員を対象にしたセミナーの実施
●観察・実験書のダウンロードサイトの立ち上げ

*1 ローターエバポレーター…減圧して固体や液体の蒸発を促進する器具。
 *2 分光光度計…「紫外線」など光の波長ごとに当たる対象の吸光率を測定する器具。
 *3 中和滴定…濃度がわかっている塩基や酸を加え、中和させることで酸や塩基の濃度を調べる。

“ラオス版・水溶液の性質実験”

【用意するもの】

- ムラサキキャベツ
- 包丁
- 鍋
- コンロ
- 米粉の麺
- レモン
- 重曹
- 水

【実験手順】

- 1 ムラサキキャベツを半分に切り、鍋の水に入れて紫色が抜けるまで煮る。
- 2 ムラサキキャベツを取り出し、麺を入れて紫色に染まるまで煮る。
- 3 麺を取り出し、レモン汁（酸性）、重曹（アルカリ性）、水（中性）をかけて、それぞれ色がどう変化するかを見る。

Aさんの要望に従った活動をひとつひとつ真摯にこなすうちに、田口さんの人間性や実力に対するAさんの信頼は徐々に増していき、そうしてようやく田口さんの提案に耳を傾けてもらえるようになったのは、着任して1年ほど経ったころだ。学生たちに観察・実験の授業の「実習」をさせる次のようなプログラムの導入をAさんに提案したところ、受け入れてもらうことができたのだ。

1 田口さんがまず、現地の市場で安く買える材料だけで、かつ中学生が楽しめるような観察・実験を20

個考案。考案した観察・実験の概要はBさんにも伝える。

2 「本当にラオスでできるかどうか」などを基準に、20個のなかから12個を学生たちに選んでもらう。

3 選ばれた12個を、授業のなかで学生たちに説明する。その際使う材料の分量など細かな情報は伝えない。

4 学生たちを5、6人ずつのグループに分け、12個の観察・実験についてそれぞれ数回にわたる予備実験をさせる。そのなかで、使う材料の分量や手順の詳細などを自分たちで確認・検討させる。その後、学生たちに12個のそれぞれについて手順をわかりやすくポスターにまとめさせる。

5 学生が近隣の中学校や高校に赴き、自作のポスターを活用しながら観察・実験を行う授業を実践する。

このプログラムの対象とした学生は、4年生の約50人。実際に行った観察・実験は、ラオスが麺料理の豊かな国であることを踏まえて考案した、麺を使って水溶液の性質を調べの実験（上掲）などだ。実習先は、Aさんが開拓してくれた5校。

実習後、学生にとったアンケートでは、「観察・実験ができるようになった」「教員になったら観察・実験を実践したい」という回答が8割超にのびた。なかには、その後に行われた教育実習の際に早速実践する学生もいた。一方、このプログラムに対するBさんやAさんの評価も高く、田口さんの帰国後も配属先で継続されている。

#私が感じた協力隊の強み

「ともに働く」ことで相手の心を動かせる点



左からBさん、田口さん、Aさん

PROFILE

1980年生まれ、東京都出身。明治大学大学院理工学研究科博士前期課程修了。製薬会社勤務（営業職）を経て、高校教諭（理科・化学）を9年間務める。2017年6月に協力隊員としてラオスに赴任（現職教員特別参加制度）。19年3月に帰国し、復職。

活動概要

サバナケット教員養成校（サバナケット県カインソン・フォンヴィーハーン郡）に配属され、化学に関する主に以下の活動に従事。

- 観察・実験の支援
- 教員を対象とする観察・実験の講習会の実施
- 学生の実習活動の企画・支援

したのは、Bさんには理科の観察・実験に関する知識が決定的に不足しており、それまで授業ではほとんど実践していなかったことだ。ラオスの国立大学を卒業している優秀な人材だったが、日本では高校で学ぶ「中和滴定」すらできない状態だった。観察・実験についてどのような教育を受けてきたのかを尋ねたところ、高校までは通っていた学校に観察・実験の器具や材料が一切なく、初めて経験したのは大学3年生のときのことだった。

Bさんとの協働でもうひとつ明らかになったことがあった。配属先に、「学生たちが教鞭をとるようになっていくなるときに必要となる知識を教える」という意識がないことだ。配属先が教育目標としていたのは、学生の化学の知識を増やすこと。「メスシリン

ダーは液体の体積を正確に量ることができる器具」といった知識は幅広く教えるが、中学生がそれらを使って行うような観察・実験を経験させることは皆無だった。

田口さんは、化学科を統括するAさんに、「学生が教員になったときに実践できるような観察・実験をBさんにマスターさせたい」旨の相談をしてみた。しかし前向きに検討する様子が見られず、「そんなことよりも、高度な知識を伝えてほしい」と譲らないのだった。

田口さんは、自分がAさんの立場に立ったときにどう考えるかを想像してみた。来たばかりの外国人に従来のやり方の変更を提案されてもそれに伴うリスクを警戒するだろう――。そう感じた田口さんは、まずはAさんの要望に全力で応えることに

した。そうして取り組んだことのひとつは、段ボールに入ったままになっていたロータリーエバポレーターや分光光度計のセッティング。それは中学校や高校の授業で扱うものではなかったものの、「学生に学ばせたい」というAさんの要望があったため、実行した。

Aさんの要望により行ったもうひとつの活動例は、近隣の中学校や高校の理科教員を対象に行ったセミナーの手伝いだ。アジア開発銀行が主催するもので、配属先の教員が講師となつて観察・実験を紹介することが求められた。同僚たちに観察・実験を紹介する力が不足していたなか、田口さんは準備から当日の進行に至るまで、手厚いフォローを行った。

観察・実験の実習を創設

観察・実験の実習を創設



1 Bさん(左)に観察・実験の指導をする田口さん 2 実験器具が入ったままの段ボールが山積みになっていた実験室を整理する同僚(左)と学生たち 3 中学生に観察・実験の指導をする学生(左) 4 学生たちが中学校や高校での観察・実験授業の実習で利用した、手順を解説する自作のポスター 5 学生たちに観察・実験の指導をする田口さん(左)

教員養成校配属

田口耕平さん

Taguchi Kohei

(ラオス・理科教育・2017年度1次隊)

中・高等学校教員の卵たちによる観察・実験授業の現場実習を導入

教員養成校の化学部門に配属された田口さん。学生たちが教員になったときに実践できるような観察・実験の指導が手薄だったなか、中学校や高校に赴いてその実習を行うプログラムを導入した。

課題は突き止めたものの

田口さんの配属先は、ラオスに8校ある教員養成校のうちの1校。4年制の中・高等学校教員養成課程にある自然科学部化学科の一員として、教員の卵を対象とする化学の授業の質向上を支援することが、求められていた役目だった。同科には各学年に20、30人のクラスが2つずつあり、授業を回していた教員は5、6人。田口さんのカウンターパートとなったのは次の2人だ。

■田口さんと同じ三十代後半で、学事課に所属しながら化学の授業も担当していた男性教員（以下、Aさん）。

■二十代半ばの男性教員（以下、Bさん）。

田口さんが着任したのは、配属先の長期休暇の真っ只中。手始めに行ったのは、実験室のチェックだ。試験管やメスシリンダーなど基本的な器具は大量にあったものの、実験台の上に放置されており、使われている気配がなかった。また、やはり基本的な器具である二股試験管などがなかった。一方で、外国から寄贈されたロータリーエバポレーターや分光光度計といった高価な器具があるなど、品揃えのアンバランスが顕著だった。

長期休暇が明けると、Bさんとの協働が開始する。ともに実験室の整理に取り組み、一方、彼の授業でも観察・実験をさせてもらうようになった。協働を始めてすぐさま判明

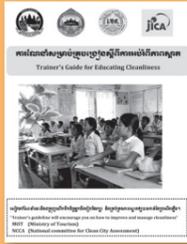
その後、田口さんはこのプログラムを配属先以外でも取り入れてもらいたいと考え、そのための策も打った。12個の観察・実験の手順について学生がまとめた「観察・実験書」を現地語で冊子にまとめ、国立大学の教育学部や全国の教員養成校などに配布。また、全国の教員養成校の教員が集まる理数科教育分野の学会でもプログラムの詳細を報告。他の教員養成校の教員のなかにも興味を持つ人がいることを確認したうえで、帰国の途に就くことができた。

ボランティア成果品
Pick Up
(理科教育分野)

JICA海外協力隊員が作成する成果品については、その共有・活用の促進を目的に、JICA青年海外協力隊事務局が「ボランティア成果品」として登録・保管する制度を設けています。成果品の登録・活用を希望する場合は、在外事務所にご相談下さい。

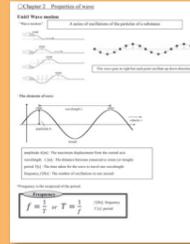
●『ニンジン・レタス・ピーマン・オクラの採種』

ニンジン・レタス・ピーマン・オクラの自家採種方法を紹介。各野菜の花や種、野菜の育ち方も学べる視覚教材 (PDF・英語/作=トンガの野菜栽培隊員)



●『Trainer's Guide for Educating Cleanliness』

作者:カンボジアの理科教育隊員
内容:理科教育に関する指導教本。微生物実験やゴミの分別などの指導案がまとめられている。
形態:PDF・英語とクメール語



●『生徒の物理学学習の促進と教員の物理指導の質の向上』

作者:サモアの理科教育隊員
内容:理科教育に関する指導教本
形態:PDF・英語

●『野菜栽培マニュアル』

15種類の野菜の栽培マニュアル。芽の種類の違いや播種・収穫時期、播種方法の違いを学ぶことができる (PDF・フランス語/作=セネガルの野菜栽培隊員)

協力隊技術専門委員が回答 活動Q&A集



【回答者】

たちばなかつひこ
橘 克彦さん

- JICA海外協力隊技術専門委員 (担当分野:理科教育・数学教育)
- 元科学館長・元中学校長

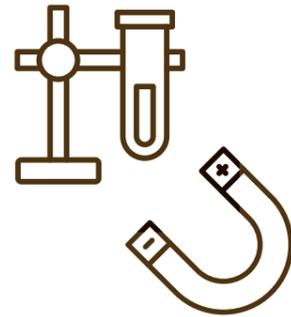
JICA海外協力隊員への技術支援を目的に配置されている技術専門委員。派遣中隊員から寄せられた活動に関する相談と、それに対する技術専門委員による回答の例をご紹介します。

Question 1

現地調達可能な材料を用いた観察・実験の紹介

中・高等学校で活動する理科教育隊員より

中・高等学校で理科教育隊員として活動を始めました。要望されているのは、現地で調達可能な身近な材料を用いた観察・実験の紹介です。同僚は観察・実験をほとんど行わず、板書主体の授業に徹しています。観察・実験の紹介が要望される理由は理解できるのですが、「現地で調達可能な身近な材料やそれらを用いた観察・実験」は簡単には思いつきません。どのように対応すべきか、ヒントをいただければと思います。



Answer 1

ここではまず、2つの観点で考えてみましょう。1点目は、調達可能な身近な材料についてです。2点目は、それを用いた観察・実験の紹介についてです。どちらも言うのは簡単ですが、現実としては日本国内でも容易にできることではありません。また、どのような観察・実験を紹介したいのかが決まらなければ、どんな材料が必要になるかも分かりません。

以前、電磁石の実験を行いたいとのこと、数カ月を要して電気ブランコの実験具を自作した隊員がいました。教科書には掲載されているのですが、実際の動きを体感させたいとの考えからのチャレンジです。エナメル線や磁石を手に入れるまで、多くの同僚に助けられながら探し回ったそうです。材料が揃えば作ることは容易です。生徒が実験をして、その驚き方を見た同僚は、理科の授業に実験を取り入れることの必要性を理解し、興味を持ち始めたとのことでした。以下、そこに至るまでの対応について列記します。

- ①「現地で調達可能な身近な材料」を考えるよりも、まずはどのような観察・実験が教科書に掲載されているかを調べる必要があります。
- ②それらの中から生徒にとって体験さ

せたい観察・実験を選択し、その道具が学校にあるかどうかを確認する必要があります。

③観察・実験具が無い場合、それが自作できるかどうかを考えます。自作が可能となれば、必要な材料を探すことになりません。

④材料探しは、同僚や現地の知人に助けてもらうことになりません。日々の生活の中で積極的にショッピングモールや日常の小物を販売する店などを見ておく必要があります。

⑤材料が揃えば、あとは作るだけです。

ここでは、労を惜しまなければ実践が可能です。付随して、それまでにかかる費用のことも忘れてはいけません。学校にそのような予算があるか、製作する道具があるか、所属長との相談を忘れてはいけません。2年間の活動期間でどの程度可能か分かりませんが、身近な材料を用いた観察・実験の紹介を目的とするのではなく、授業に必要な実験具を必要に応じて作り、修理していくことが大切な活動になるのです。特にこのようなことは一人で行わず、同僚との協働作業が不可欠です。このような活動を通して現地の教育力を高めたいですね。

Question 2

理科実験室の改善について

高校で活動する理科教育隊員より

理科教育隊員として活動を始めるようとして驚いたことは、観察・実験を重視した授業を推進するようにとの要請だったにもかかわらず、実験室には汚れたままの実験器具などが山のように積み重ね、ラベルが読み取れない薬品も棚に置かれている状態だったことです。これからのように対応していったら良いか、壁にぶつかっています。

Answer 2

理科教育活動における基本的かつ最大の課題ですね。日本国内でも、理科室や理科準備室を見れば、その学校の理科教師の力量が分かると言えます。協力隊員が派遣される地域でもまさにそのことが大きな課題です。

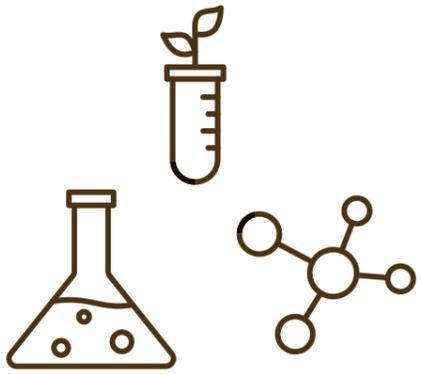
いずれにしても、まずは片付けから始めなければなりません。くじけずに、最初が肝心ですから心してください。任地の多くの学校の実情として、一度使った器具は洗浄もせずに使いつぱなし、壊れたものはそのまま、高価な器具でもマニュアルが紛失して使い方が分からない等の情報を耳にします。このような状況を改善して、これらを使用できるようにすることが第一歩です。

しかし、一人でそれらを綺麗に片付けても、同僚はお構いなしにそれらを使って、またそのままにしてしまうことでしょうか。それでは何の意味もありません。片づけにおいては、次のようなことから始めてみてください。ただし、これらを始めることについては、所属長と同僚の理科関係の先生方に了解を得ることが大切です。そのためには、自分ができるような理科室にしたいか、描いておく必要があります。

- ①理科係のような役割を生徒に決めさせ、それらの生徒と一緒に片づける。

- ②同僚の理科の教師と一緒に片づける。
- ③片づけにおいては、器具・薬品等の置き場所を決める。
- ④物品帳簿や物品表を作成する。
- ⑤片づけは定期的に行い、作業に関わった生徒や教師の名前を公表する。このことは、活動のPRにもなり、特に同僚には自信とプライドを持ってもらえることになりません。
- ⑥不明な器具や使用方法が分からない道具等も、最近はインターネットで調べることができます。それらの活用も積極的にいきましょう。
- ⑦不必要なものは積極的に処分する。特に薬品の処理や器具等の処分方法については、所属長と相談して行うことが肝心です。

これらの活動が実践できれば、同僚の理科の教師の力量も向上し、生徒の理科に関する興味・関心も高まるはずです。観察・実験を重視した授業は、これが出発点です。活動を通して、生徒の学習に役立つ観察・実験のアイデアも生まれくるのです。



“専門外”への対応法

「現場」の課題を探り、その解決に取り組むのが協力隊。ときに、自分の専門性だけでは対応しきれないような課題の解決に挑むことも必要となる。そうした場面で、専門外の知識や技術をどう得ていくか。アイデアのヒントとなるような事例をピックアップしてみた。

CASE 1



[助っ人＝協力隊員]

こみやしょうた
古宮 将太さんの事例
(ヨルダン・理学療法士・2017年度2次隊)

古宮さん基礎情報

PROFILE

1991年生まれ、千葉県出身。専門学校卒業後、病院に理学療法士として勤務。2017年9月、協力隊員としてヨルダンに赴任。19年9月に帰国。

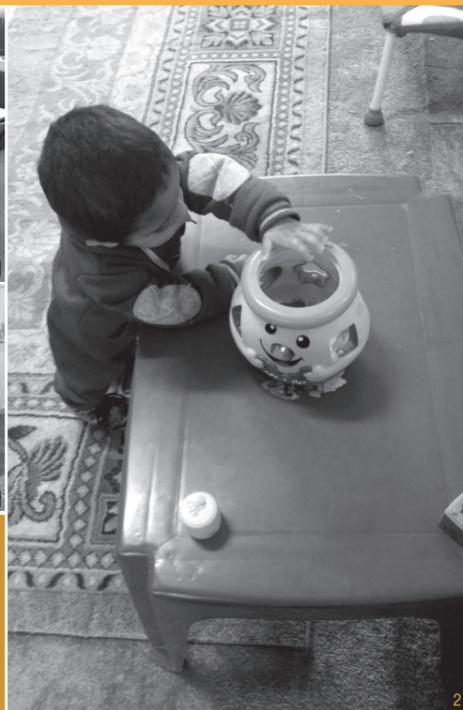
活動概要

知的障害児の通所施設に配属され、主に以下の活動に従事。

- 利用者への理学療法の実施と家族指導
- 地域の障害児・者を対象とする訪問リハビリの実施
- 利用者を対象とするアクティビティの実施(障害児・者支援隊員との協働)



- 1 平行棒で歩行訓練に取り組む脳性麻痺の女児
- 2 おもちゃを使った訓練に取り組む脳性麻痺の男児
- 3 古宮さんと利用者たち
- 4 はしご状の手すりを付けて子どもでも歩行訓練に使えるようにしたランニングマシン
- 5 配属先にふんだんにあったおもちゃ



障害児・者支援隊員の活動から 知的障害児への接し方を会得

高齢者への理学療法に携わってきた古宮さんが配属されたのは、知的障害児の通所施設。

「小児」や「知的障害」のケースへの対応方法については、障害児・者支援隊員がヒントを与えてくれた。

古宮さんが配属されたのは、知的障害児に特別支援教育とリハビリを行う通所施設。利用者は自閉症やダウン症、脳性麻痺などの子どもで、人数は常時40人ほどだった。古宮さんに求められていた役割は、リハビリ部門のレベルアップを支援すること。着任当時、同部門にいたスタッフは2人で、いずれも専門教育は受けていなかったが、かつて理学療法士にOJTで技術を学んだとのことだった。

派遣前に得た恩師の教え

古宮さんが派遣前に理学療法士として働いていたのは、高齢者ばかりが利用する温泉病院。「小児」や「知的障害」の患者への理学療法は経験がなかった。協力隊の選考試験に合格し、知的障害児への理学療法に携わることができるとすぐさま、足り

ない専門知識の習得を始める。参考書にもあたってみたが、重要なことを教わったのは、母校の専門学校で恩師だ。小児と高齢者、障害者と健常者など、対象が違っても理学療法の根本は一緒である。理学療法の技術は実務に携わるなかで磨いていくものであり、現地に行ってから勉強のほうが大事だ。そんなアドバイスによって古宮さんを落ち着かせ、「現場に向き合う」という、理学療法士としてもっとも大切な姿勢を再認識させてくれたのだ。

「小児」への対応方法

赴任すると、「対象が違っても理学療法の根本は一緒だ」という恩師の教えはそのとおりだと感じた。しかし、理学療法のやり方の細部については、対象ごとにポイントが異なることも感じた。小児への理学療法に特有なのは、「おもちゃ」が重要な

道具となる点だ。配属先には、外国から寄贈された既製品のおもちゃが数多くあった。それを見て思い出したのは、技術補完研修を受けた施設で行われていた小児への理学療法。おもちゃ遊びを通じた治療に大半の時間が割かれていた。一方、配属先の同僚たちは、おもちゃを一向に活用していなかった。そこで古宮さんは、配属先にあるおもちゃのひとつひとつについて、どのような身体機能の訓練に活用できるかを考え出すことに注力。そうして実際におもちゃ遊びをさせてみると、その遊びへの興味の度合いによって、子どもたちの集中力の持続度合いも異なってくるのがわかってくるのだ。

そこで古宮さんは、子どもたちを注意深く観察し、それぞれどのようなおもちゃ遊びに興味を持って見極めることに力を入れるようになる。そして、「子どもの興味を見定め、それぞれに合ったおもちゃ遊びで治療を行う」という小児への理学療法の骨格が見えてくる。それを実践し、同僚たちに伝えるようになっていった。

「知的障害」への対応方法

「知的障害」への適切な対応方

法については、着任以来、暗中模索が続いた。最大の困難は、子どもたちとの意思疎通が容易でなく、行動が予測できない点だ。たとえば、平行棒を使った歩行訓練をさせると、歩くスピードをどんどん速めてしまう子がいたが、口頭で静止させるのは難しかった。

そうした状況への対応方法について参考になったのは、同僚たちの「経験値」だ。たとえば、彼女たちが歩行訓練に使っていたのは、配属先に置かれていた大人用のランニングマシン。そこにどのような背丈の子どもでもつかまれるようなはしご状の手すりを据え付け、それぞれの子どもに応じたスピードに設定して歩かせていたのだ。乱暴なやり方だとは感じたが、同僚たちが経験を通じて編み出したひとつの工夫だと考え、古宮さんも取り入れるようになった。

「知的障害」への対応方法についてとりわけ勉強になったのは、任期の半ばに配属先の特別支援教育部門に着任した障害児・者支援隊員(以下、Aさん)の振る舞いだ。オリジナルのおもちゃを次々に手づくりしては、アクティビティに取り入れる。振ると音が出るペットボトル製のマラカスや、同じくペットボトル製のボウリングピンな

で、「高齢者への理学療法で『認知症』や『高次脳機能障害』に対応してきた経験は、『知的障害』に対応する際に役立つかもしれない」といった具合に、自分が持つ技術の価値をひとつひとつ確認していった。

小児への対応方法を学ぶためにリハビリ施設で受けた技術補完研修では、後述のとおり、小児を専門とする理学療法士たちが働く様子を見学できたことが、もっとも大きな収穫だった。

「小児」への対応方法

赴任すると、「対象が違っても理学療法の根本は一緒だ」という恩師の教えはそのとおりだと感じた。しかし、理学療法のやり方の細部については、対象ごとにポイントが異なることも感じた。小児への理学療法に特有なのは、「おもちゃ」が重要な

だ。「おもちゃならたくさんあるのに、なぜわざわざ手づくりを？」と尋ねると、「こういうおもちゃのほうが、子どもたちにはより楽しいはず」と言う。そこで古宮さんが理解したのは、「どうすれば対象者により楽しいと感じてもらえるか」を追求することが、知的障害児の支援に携わる際にもっとも重要であるということだ。そうして古宮さんは任期の後半、Aさんが行うアクティビティの手伝いなどを通じて、知的障害児に対する支援方法への理解を深めながら、自身の活動を進めるようになった。

Aさんとかかわるようになって後には古宮さんが後悔したのは、専門性の異なる隊員の知恵をもっと積極的に借りておけば良かったということだ。古宮さんはそれまで、ヨルダン国内の移動が手間だったこともあり、他隊員の活動現場に足を運び、見学させてもらうということがほとんどなかった。また、他国で活動する同期隊員に活動に関する相談をしたこともなかった。それを任期の早い段階からやっていたら、「小児」や「知的障害」という自分の専門外の事柄について、より豊かな情報を得られたに違いないと悔やまれたのだ。



- 1 学校に食べ物を売りに来る女性たちを対象に、「爪が伸びていないか」など、衛生上留意すべき点を確認する平尾さん
- 2 巡回先の学校で設置された簡易手洗器（ティッピー・タップ）
- 3 巡回先の学校で手洗いの指導を行う配属先の研修生
- 4 図書館で地域の子どもたちに折り紙を教える平尾さん（右端）



「助っ人＝現地の人」

ひらお りか
平尾莉夏さんの事例
(ペナン・コミュニティ開発・2017年度1次隊)

平尾さん基礎情報

PROFILE
1994生まれ、静岡県出身。大学卒業後の2017年7月、協力隊員としてペナンに赴任。19年7月に帰国。

活動概要
ドンガ県ジュグー市の市役所に配属され、主に以下の活動に従事。

- 学校での衛生啓発
- 地域での衛生啓発
- 子どもたちに向けたアクティビティの提供

CASE 2



大学の文系学部を卒業後、協力隊に参加した平尾さん。専門外の「保健・衛生分野」に関する啓発に取り組み、不足していた知識を補ってくれたのは、配属先が受け入れていた研修生たちだった。

「現地に合う衛生啓発」の導き手に 公衆衛生を学んだ研修生たちが

平尾さんが配属されたのは、人口約28万人の市の市役所。求められていた活動は、衛生啓発の実施やゴミ収集システムの改善などだ。それらの業務を担当する「整備課」には、当時、課長を含めて4人の事務スタッフと、地域での衛生啓発を担当する3人の「衛生普及員」が配置されていた。

要請書では「衛生啓発」がメインの活動になりそうであることがうかがえたが、「ゴミ収集システムの改善」という言葉も記載されていたため、平尾さんは「ゴミ」をテーマにした衛生啓発に重点を置くことが配属先に求められるだろうと予測。平尾さんは文系学部の出身であり、「ゴミ」は専門外だった。そのため、本やインターネットで

研修生たちとの出会い

しかし、「手洗い」や「排せつ」については、赴任前の下調べをやっていた。多忙な同僚たちに尋ねるのははばかられたことから、まずはインターネットを利用して独学。「手洗いの

ゴミのリサイクルなどについて丹念に調べたうえで赴任した。ところが、着任すると、配属先は「どのような活動に取り組んでも構わない」というスタンスであることが判明。そこで平尾さんが着目したのは、現地の人々がよく戸外で大小問わず排せつをしている点だ。町はたしかにポイ捨てされたゴミが多かったが、排せつ物も病気の感染の温床になると思われたことから、平尾さんは「ゴミ」に限らず、幅広いテーマの衛生啓発を進めるのが妥当と考えた。

そうして、まずは衛生に関する現地の問題を把握するための情報収集を開始する。たとえば、同僚や近所の住民に「病気を予防するためにどのようなことを心がけているか」を尋ねた。また、汚水の垂れ流しやゴミの不法投棄を注意するために町を回る衛生普及員と同行し、衛生に

関する町の状態を確認した。以上のような情報収集によってわかったのは、住民には「病気を予防する」という意識がほとんどないことだ。また、「野外排せつ」については、「トイレがないから」という理由ではなく、「野外のほうが気持ちが良いから」といった理由でしているケースもあることがわかった。そうして平尾さんは、学校を巡回し、「手洗い」「排せつ」「ゴミのポイ捨て」を3本柱とする啓発活動を行うという計画を立案した。

正しい手順」や「野外排せつが衛生上良くない理由」などについて調べたほか、フランス語でそれらをわかりやすく伝えられるよう、フランス語の資料にも目を通した。そうして通り一遍の説明はできるようになり、一人で学校回りを始めたが、衛生に関する現地の状況の細かな点を把握することや、それに即して啓発の内容や方法をアレンジする「応用」は心もとなかった。そうしたなかで助っ人となってくれたのは、着任の約半年後に整備課にやってきた3人の研修生たちだ。専門学校や大学で公衆衛生を学んだ若者たちだった。彼らが着任すると、平尾さんは衛生普及員による巡回への同行に誘ってみた。すると、たとえば蓋がされていない井戸を見かけたときに、井戸水が汚れてしまうメカニズムを平尾さんに説明してくれるなど、町の衛生上の問題を見る目を鍛えてくれるのだった。

子どもや教員の衛生に対する意識のさらなる向上を狙い、平尾さんは校内の衛生環境の整備を学校間で競う以下のような「清掃コンクール」を2度にわたって開催。そこでも研修生たちが活躍してくれた。

1 「トイレの数」など、校内の衛生環境の良し悪しの基準となるチェック項目を30ほど設定し、合計点が100点となるよう各項目に配点。

2 参加校を回り、各チェック項目について現状を確認する。

3 記入済みのチェックシートを学校側に渡し、それを参考に衛生環境の改善計画を立て、取り組んでもらう。その間、平尾さんや研修生がときどき各校に足を運び、活動のフォローをする。

4 3カ月後に再び同じチェック項目で現状を確認し、採点。順位を発表し、上位の学校に景品を授与する表彰式を行う。

平尾さんは、現地の衛生上の問題をより正確に知るため、市内の医療施設で働く医師にも話を聞きに行ったが、その際も研修生が同行し、サポートしてくれた。医師に尋ねたのは、現地で多い疾患の種類や、その原因など。専門外の事柄のフランス語による説明は理解が容易では

ないなか、研修生たちは事後に医師の話をわかりやすく解説し直してくれた。

やがて研修生たちは、精力的に学校を回る平尾さんに共感し、学校巡回にも同行してくれるようになる。子どもたちから出る質問に平尾さんが答えられないときには、研修生たちが代わって回答。それを聞くことで、衛生に関する平尾さんの知識も徐々に増していくのだった。

任期の2年目に入ると、学校での啓発の講師役も研修生たちに分担してもらうようになる。彼らは3カ月の研修期間が終わった後、専門性を生かした仕事に就くチャンス待ちながら、バイクタクシーの運転手などとして働くようになったが、それでも仕事の合間を縫って平尾さんの活動に加わってくれた。

互いに助け合う関係性

任期の2年目に入ると、学校での啓発の講師役も研修生たちに分担してもらうようになる。彼らは3カ月の研修期間が終わった後、専門性を生かした仕事に就くチャンス待ちながら、バイクタクシーの運転手などとして働くようになったが、それでも仕事の合間を縫って平尾さんの活動に加わってくれた。

CASE
3

[助っ人=ウェブ]

鈴木まほろさんの事例
(ケニア・青少年活動・2017年度2次隊)



鈴木さん基礎情報

PROFILE

1981年生まれ、神奈川県出身。日本の大学で美術を、ケンブリッジ大学大学院修士課程で考古学を学ぶ。民間企業勤務等を経て、法務省関東地方更生保護委員会に採用され、保護観察所等に保護観察官として勤務。2017年10月、協力隊員としてケニアに赴任(現職参加)。19年6月に帰国。

活動概要

犯罪を犯した少女を保護観察するナクル女子保護観察宿舎(リフトバレー州ナクル県)に配属され、主に以下の活動に従事。

- 美術、音楽、ダンス、手工芸などの授業の実施
- 各種イベントの開催



1 美術の授業の作品例。石にアフリカ各国の国旗の柄を描いた
2 美術の授業に取り組む入所者たち
3 音楽の授業の様子
4 配属先内の文化祭で鍵盤ハーモニカの合奏を披露する入所者たち

任期前半に蓄えた音楽の知識で 任期後半に音楽授業を実施

犯罪を犯した少女の保護観察施設に配属された鈴木さん。自身が持つ専門性は「美術」と「更生教育」だったが、着任後にウェブを活用して「リコーダー」を習得。音楽の授業を立ち上げるに至った。

に音楽の授業をやってみたこともあった。音楽教育は鈴木さんの専門外だったが、配属先には前任の隊員が集めたソプラノリコーダーや鍵盤ハーモニカがいくつかあったからだ。しかし、早々に継続を断念する。授業を受ける少女たちの多くは学校に通ったことがないため、「集団行動」が苦手であり、好き勝手に音を鳴らし続ける「カオス状態」になってしまうのだ。

上限がない接続契約をしていたため、インターネットの利用に不自由はなかった。最初に参考にしたのは、リコーダーのあらましを解説するサイト。指づかいが異なる「イギリス式」と「ドイツ式」があることなど、基礎的な知識をそれらで学んだ。その後、YouTubeの投稿やダウンロードで購入したアルバムなどでプロの演奏を確認したうえで、練習を開始する。

座を受講する。送られてきた楽譜と手本の録音データを参考に課題曲を練習し、演奏を録音したデータを送ると、感想や改善点の指摘を書いたメールが送られてくる。そんなやりとりを3回繰り返す講座だ。

「リコーダーの腕がずいぶん上達した」と感じ始めるのと時を同じくして、音楽授業の再開を後押しする出会いがあった。地域の子どもたちを対象に音楽教室を開いていた日本人女性(以下、Aさん)だ。配属先には宗教教育の授業をするために近所の教会の牧師などが定期的に行ってきたが、Aさんはその教会の会員だった。彼女に音楽授業の件を相談すると、「都合がつくときは参加する」と協力を申し出てくれたのだ。そうして鈴木

のレベルで止まったままだったからだ。活用したのは「インターネット」。自宅では、通信量の

ケニアに戻ると、アルトリコーダーの腕を磨くべく、インターネットで受けられる無料の講

件を相談すると、「都合がつくときは参加する」と協力を申し出てくれたのだ。そうして鈴木

さんが再び音楽の授業を始めたのは、着任して1年ほど経ったころである。

まずリコーダーより習得がやさしい鍵盤ハーモニカの指導から入り、やがてリコーダーの指導へと移っていった。その最初の練習曲に選んだのは、少ない指だけで演奏できる『メリーさんのひつじ』だ。小学校教員向けの音楽授業の進め方を参考にする日本のウェブサイトを参考に、鈴木さん自身が選曲。インターネットを活用した任期前半の独学によってリコーダー指導の要領を把握できていたことで、着任当初のように「カオス状態」に陥ることなく授業を進めることができた。

『メリーさんのひつじ』を少女たちがマスターすると、彼女たちが知っている曲をAさんに挙げてもらい、それらを中心に指導するようになった。ケニアの国歌や、現地の教会でよく歌われている曲などだ。鍵盤ハーモニカの指導でも、同様に練習曲の幅を広げていった。

に勝手に吹き進めてしまったり、相手に苛立って喧嘩を始めてしまったりといったこともあったが、鈴木さんは粘り強く声をかけをし、協力を促した。協調性を養ううえで格好の機会となったのは、配属先内で行われた「文化祭」だ。音楽の授業を再開して2カ月ほど経った時期と、それからさらに半年ほど経った時期の2回、少女たちは数人ずつのグループに分かれて鍵盤ハーモニカの合奏を披露した。「犯罪を犯した子どもたちの施設」という配属先の性格上、外部の人を広く呼ぶわけにはいかず、聴衆は協力隊員などが、文化祭での発表に向けたグループごとの練習が、少女たちにとってはやはり協調性を鍛える場となったのだ。

任期終了時に鈴木さんとAさんが音楽の授業を振り返った際、一致した感想だったのは、「少女たちが音楽の授業を通じて成長した」というものだ。たとえば、彼女たちは当初、使ったリコーダーを使えばなしにしてきた。しかし、次にそれを使う人のために授業の終わりに口を付ける部分を洗うようになるなど、「他者」のことを考える姿勢が次第に見られるようになっていったのだ。

鈴木さんの配属先は、保護観察を目的に犯罪を犯した少女を受け入れる宿舎。収容人数は常時20人程度という規模だった。学校に通う子どもは食事や寝泊りだけをするが、通っていない子には毎日、洋裁などの職業教育や識字教育、宗教教育など、更生・自立に向けた授業が行われる。マネージャー以外の常勤スタッフは寮母や寮の料理人などだけで、授業は外部の専門家が非常勤で担当していた。そうしたなかで鈴木さんに求められていたのは、毎日午後の2時から4時までの授業枠を使って、ほかの授業で扱われていない分野の教育を行うことだった。

任期前半の「下ごしらえ」
鈴木さんの派遣前の職業は保護観察官だが、大学や大学院で専攻したのは「美術」。芸術作品の創作を通して心身の成長を図る「アートセラピー」のファシリテーションを学んだこともあった。そこで、着任するとまずは「美術」の授業を開始する。つくった作品について互いに良い点だけを指摘し合うことで、自他ともに大切にされる姿勢を身につける、アートセラピーの要素を取り入れた授業だ。



[助っ人=日本の知人]

やまもとやすひろ
山本康博さんの事例
(SV/アルゼンチン・経営管理・2017年度2次隊)

山本さん基礎情報

PROFILE

1964年生まれ、山口県出身。大学卒業後、銀行に30年間勤務。中小企業の診断・支援・ファイナンスを主体とする法人営業に携わる。2017年9月、シニア海外ボランティアとしてアルゼンチンに赴任。19年9月に帰国。 ※派遣名称は派遣当時のものです。

活動概要

国立工業技術院の出先機関のひとつであるサルタセンター(サルタ州サルタ市)に配属され、主に以下の活動に従事。

- 企業を対象とする経営管理の技術指導
- 5Sの企業間コンペの支援
- 大学や地方自治体、組合等における経営管理等のセミナーの開催

CASE 4



- 1 山本さんが5Sの指導を行い、整頓が行き届くようになった家具メーカーの工場
- 2 経営管理の指導をするために飲料メーカーのオレンジジュース工場を視察する山本さん(中央)
- 3 日本の前職の同僚から得た情報をもとに山本さんが作成した「受注引渡管理表」のサンプル
- 4 日本の前職の同僚から得た情報をもとに山本さんが作成した「週間行動計画表」のサンプル。商社が抱えていた「営業職が社外で何をやっているのか把握できない」という課題を解決するために活用を勧めたものだ

Cliente	Item	Cantidad	Proveedor	Ranking	Fecha de pedido	Fecha de entrega	Tiempo de entrega	Opinión de clientes	Comentario
Ejemplo S.A.	Asado	5	Chacon S.A.	A	8/9	8/12	4
	Tabla	3	Yasu S.A.	B	8/9	8/10	7
	Palo	2	Pato S.A.	C	8/10	8/20	11

Fecha:	Lunes	Martes	Miércoles	Jueves	Viernes	Sábado
1	Cliente	Cliente	Cliente	Cliente	Cliente	Cliente
2						
3						
4						
5						
6						
Comentarios:						
Feed Back:						



経営管理のディテールについて 前職の同僚たちに情報提供を依頼

経営管理の技術支援を行う機関に配属された山本さん。銀行勤務で得た幅広い知識は有用だったが、技術の指導に必要な細かな知識は随時、前職の同僚たちから仕入れた。

山本さんが配属された国立工業技術院のサルタセンターは、サルタ州内の企業を対象に「経営管理」の技術指導を行う機関。同院が全国16カ所に有する同種の機関のひとつだ。同僚は3人。彼らの技術レベルの底上げに向け、指導・助言を行うことが、求められていた役割だった。

法人営業。融資するかどうかを決めるために企業を評価する際は、各部門の状態をくまなくチェック。また、担当する企業は製造や流通、教育など、業種を問わなかったからだ。

山本さんの活動の基本スタイルは、同僚のいずれかとともに企業を回って現状の聞き取りを行い、支援の希望があった企業は以後、週に1、2度のペースで訪問し、それぞれの課題に応じた指導を行うというもの。1年目はサルタ州内の企業約10社を回り、もともと長いケースで半年ほどにわたって支援を続けた。その主な内容は、各種部門管理の改善策の提案、全般管理にあたる「5S活動」や「目標管理」の導入支援などだ。その成果に対する国立工業技術院の

評価が高く、2年目は要望を受けて他州の約30社を回り、主に現状の聞き取りや診断を行った。

山本さんに幅広い「部門」や「業種」への理解があったとは言え、いずれについても「専門家」と言えるレベルではなかった。そのため、自分の記憶だけでは正確で詳細な指導をすることが難しいケースもあった。そうした局面で山本さんが頼ったのは、前職の同僚だった日本の銀行員たちだ。

山本さんは、前職で営業を担当した商社や問屋のなかに、「受注日」や「納品日」などを記す「受注引渡管理表」とも呼ぶべきものをつくり、納期管理に活用しているところがあったのを思い出した。しかし、その詳細についてはうろ覚えだった。そこで山本さんは、前職の同僚だった現役の銀行員たちにメールで相談。受注引渡管理表が彼らの手元にあるかもしれないと考えたからだ。すると、守秘義務の都合から、特定の企業が実際に使っている表を送ってもらうことはできなかったが、一般的にどのような項目を設けているかを教えてもらうことができた。その情報をもとに、山本さんはオリジナルの受注引渡管理表を作成し、指導対象の商社に提供。「商品の種類と個数」「受注日」「納品日」「受注から納品までにかかった日数」「満足度が読み取れる客からのコメント」などを記載するものだ。

肝要なのは関係性づくり

前職の同僚たちの力を借りたもうひとつの局面は、惣菜店に「財務管理」の改善策を提案した際だ。アルゼンチンの食事が「肉」に偏りがちであるなか、野菜を中心とする惣菜で「健康」

を売りにし、急成長を遂げている企業だった。健康相談に応じる栄養士を店舗に常駐させるなど、経営者の女性は発想力の光る人物だったが、「お金」へのこだわりが薄いのが難点だった。「財務の状況をちょっと見てほしい」と言われ、帳簿をチェックすると、「売掛」での販売の多さが顕著だった。様子うかがうと、回収できないままになってしまいうもたびたび発生しているようだった。

この企業を支援するにあたって山本さんが思い起こしたのは、銀行が法人への融資の金利を決める際に行う「財務分析」の方法だ。山本さんが勤めていた銀行では、「安全性」「収益性」「効率性」の3大指標について、「売掛金回転期間」(売掛金を回収するまでにかかっている期間)など下位の細かな指標によって採点し、格付けをしていた。しかし、財務分析に関して営業担当者が実務上行う作業は、下位の指標に関する数値を拾うことのみ。判定結果は専門の部署が弾き出す分業システムになっていた。そのため、山本さんは下位の指標と3大指標との対応関係については記憶があいまいだった。そこで、やはり前職の同僚たちにメールで相談。そうして提供してもらった詳細な情

報をもとに、売掛金回転期間の理想的な数値などを含め、財務に関して経営者が把握しておくべき事柄について、惣菜店に正確でわかりやすい説明をすることができたのだ。

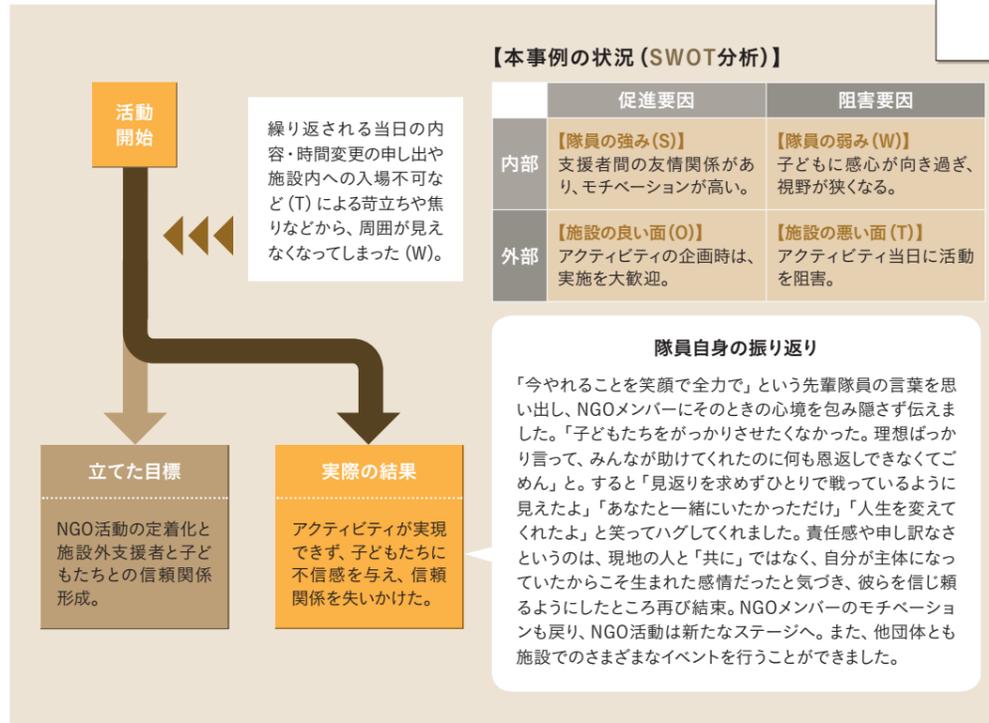
以上のように、前職の同僚たちの助けで自分の知識不足を補うことができた山本さんだったが、その経験を振り返って実感しているのは、助っ人となつてもらえるような人との「関係づくり」の大切さだ。

山本さんは、子育てがひと段落したのを機に、勤務していた銀行を早期退職して協力隊に参加。今まで積んできた経験を土台に、日本のメソッドを必要とする国の人々に伝えたい。そんな強い思いがあったからだ。退職するときには、法人営業の同じチームで苦楽をともにしてきた同僚たちと酒を飲み交わし、協力隊参加への思いを伝えた。すると彼らは、「そういうことであれば、必要になったら力になるよ」と言って送り出してくれたのだ。赴任後も、LINEを使ってしばしば近況を報告。そうした関係づくりがあったからこそ、現役の銀行員として激務をこなす彼らが、手間を惜しまずに情報の提供をしてくれたのだと、山本さんは感じている。

“失敗”から 学ぶ #178



事例整理



他隊員の分析

自分を幸せに、そして他者も幸せに

隊員自身の精神状態は活動にも大きく影響するように思います。私もそうでしたが、派遣中に自分ではどうにもできないトラブルで活動が滞ることはよくあります。隊員は責任感や情熱のある人が多く、うまくいかない状況に苦しみます。「主体は現地の人」ですが、まず任地で活動しているのは自分自身。「自分が幸せでなければ、他者を幸せにはできない」と私は考えています。どんな方法でも良いのでそこで楽しく、幸せに生きること。いつも幸せそうにしていることで、活動の主体となる人が集まったり、案外身近にあった問題解決策が見つかったりするものだと思います。

文＝協力隊経験者

- 中南米・青少年活動・2016年度派遣
- 取り組んだ活動

地域の若者の健全育成や規律の指導を目的として、市役所が運営する地元住民向けの運動クラブ・文化クラブでの指導を行うとともに、クラブ運営方法の改善にも取り組んだ。

現地職員の居場所づくり

施設の職員と私たち隊員の役割を明確にすることが、ポイントになってくると思います。現地の方々も自発的に活動を行うためには、その活動に興味を持ち、さらに達成感を味わうことが必要です。そこでまずは、職員たちに子どもたちの変容や参加してくれている学生を活用するメリットを感じさせます。他団体が活動を行ってくれることで、職員たちの仕事を軽減でき、子どもたちの自己有用感を高めるとともに、職員たちと子どもたちを繋げる架け橋のような活動と理解できたときこそ、活動が軌道に乗るのではないのでしょうか。

文＝協力隊経験者

- アジア・青少年活動・2016年度派遣
- 取り組んだ活動

人身取引被害者保護福祉センターに保護されたばかりの女子 (12～18歳) に対して、ライフスキルトレーニングと基礎学力定着のために、構成的グループエンカウンターを計画実施、学習ワークシートの作成を行った。

子どもたちとの約束だけは守りたいという 自分の思いが主体になっていた

文＝岩瀬さくらさん (ペルー・青少年活動・2017年度2次隊)

ペルーのピウラ州児童保護施設で、虐待や貧困により家族と暮らすことが困難な0～17歳、約50人の子どもたちの生活を支援するために活動した。政権や施設の交代などにより、ほとんどのスタッフが短期契約で自分の生活を優先、情熱あるスタッフも多忙を極めた。自らの生活や家族を大切にするという文化は大いに共感でき、彼らの仕事を増やすことは物理的、精神的に限界があると悟った。

一方、すべての子どもたちが「自分だけが注目される時間・ずっと想ってくれる人の存在」を欲しているのを強く感じており、ひとりひとりの時間を大切にしたい。「日常」の奪還と、施設退所後の支援の摸索を始めた。同時に、スタッフ交代や帰国後を見据えたコミュニティとの「縁結び」に力を注いでいた。信頼・応援してくれるスタッフも増え、子どもとの友情も感じるようになった。

派遣6カ月頃、子どもたちと信頼関係を築きつつ、多様な資質を伸ばし自尊心を高める目的をもって、地元大学生と施設のためのNGOを創設。企画・運営と同時に、組織編成や定着化、施設の子どもの信頼形成を目指して

た。大学だけでなく、市役所など他団体との関係づくりに努めていた。

しかし、NGOの活動を始めて半年を過ぎたころより、NGOメンバーや施設長、その他幹部スタッフと、毎回綿密に調整していたにもかかわらず、施設側の活動阻害が10数回続いた。そのため大学生のモチベーションが下がり、遅刻やドタキャンが増え、いくつものアクティビティが中止に。心待ちにしている子どもたちは不信感を抱いてしまった。私も苛立ち、「大学生や子どもたちの思いを無駄にしたくない」という気持ちと、反省や疲れなどが重なり、笑顔が減っていった。「主体は現地の人！」と思い公言していたが、人を信じられず、結局は主体が自分になっていた。勝手に孤立した気持ちになっていた。

その1～2カ月の間、私の周りからはワクワク感が消え、みんなと集まって話す機会も減っていた。後からNGOメンバーに聞いたところ、当時の私は「ひとりで戦っているように見えた」そうだ。

しかし、私を信じ、私の側について笑ってくれていた人々を思い出して、人を信じられるようにした。これにより深い新たな絆が生まれていったように感じた。



ピウラ州児童保護施設の子どものため、NGO「MUNAY Perú & Japón」の大学生と岩瀬さん。帰国前に大学生が「さくらが帰っても、施設に行く。これからはずっと続けるよ」と、子どもたちが「日本に帰っても家族と幸せにくらしてね。ありがとう」と言ってくれたそうだ。「子どもたちのためと思っていたが、子どもたちを含め、みんなが私にいい思い出を頑張ってくれていたように思います」と岩瀬さんは振り返る



PROFILE

1986年生まれ、福岡県出身。2009年、久留米大学医学部看護学科を卒業後、九州大学病院救命救急センターに看護師として勤務。14年、退職。NGOのインターンや福岡市母子保健訪問嘱託員などを経て、17年10月、協力隊に参加。19年10月、帰国。

活動概要

ピウラ州児童保護施設で、主に以下の活動を行う。

- 「日常」の奪還…宿題、掛け算の暗記、空手クラス、家庭菜園、料理などの実施
- コミュニティとの縁結び…地元大学生とNGO「MUNAY Perú & Japón」創設。
- ピウラ空手道連盟との連携
- 施設退所後を見据えた支援の摸索 など

派遣人数は少ないものの
いぶし銀の活躍をする
職種の事例をピックアップ

#F112

品質管理・生産性向上

派遣中 ▶ 1人
累計 ▶ 36人
分類 ▶ 商業・観光
活動例 ▶ 企業の品質向上のための5S・KAIZENの指導 など
類似職種 ▶ 経営管理 など

※人数は、2020年1月31日現在。



配属先の5S、改善活動の委員会メンバー。委員会メンバーは、フィジー系2人、インド系2人と卯田さん(右端)の計5人

PROFILE

1984年生まれ、滋賀県出身。2010年、京都外国語大学外国語学部英米語学科を卒業後、株式会社イマックに入社。LED照明のメーカーで生産管理、品質管理などの業務を受け持つ。8年間の職務経験後、退職し、18年1月、協力隊に参加。フィジーの国立医薬品センターで活動する。20年1月、帰国。

活動概要

5Sや、改善活動を通して、生産性向上のため主に以下に取り組む。
●業務のムラ、ムダなどを指摘、改善案の提案
●各部署への5Sトレーニングセッションの開催
●週1度の清掃活動の実施
●チェックシートを元に各部署へのモニタリング、アセスメント など



卯田洋介さん
(フィジー・2017年度3次隊)

Q 活動の最大の困難は?
カウンターパートが多忙で会議に参加できないことや、同僚がモニタリング実施のときに集まらないことなど、日程どおりに活動を進めることに困難を感じました。周りを巻き込んで活動を進めることが、成果を上げるポイントだと思っていたので、最初の1年はいかに周りに動いてもらえるか、試行錯誤していました。

Q メインの活動は?
配属先は海外から仕入れた医薬品を一括で管理している国立医薬品物流センター。センター内の医薬品はフィジー全土、周辺各国へ供給されます。問題は倉庫内での商品過多で、それにより部材の探索の無駄時間や、破損、通路の妨げ、誤発送などさまざまな障害が発生していました。それらを改善させる取り組みを、5S、改善活動とおして実施。活動は、既存の5Sチームと協力して進めていきました。たとえば、注文書に沿って商品ピッキングするにあたり、物を探す時間が誤った商品を取ることを防ぐため、商品棚に名前のタグを張り付け、「見える化」を図りました。また、回転率の高い商品を棚の上段から下段に配置し、フォークリフトでの商品ピッキングによる時間を削減させました。こうした活動を継続させ、習慣化させるために毎週清掃活動を行っていました。

Q 同職種の後輩隊員にメッセージをお願いします。
生産性向上のための5Sや業務改善は、仕事以外に私生活でも必要とされるもので、写真などによる改善の前後比較がしやすく、目に見えてわかる成果が出しやすい取り組みです。また業務改善の実施による無駄時間削減により原価削減にもつながります。非常にやりがいのある職種だと思います。他人の行動や、習慣、ルールを変えて新たなことを始めるためには何より人を巻き込む力が必要となります。いかに人を巻き込んで業務を円滑に進めるかに一番力を使いましたが、これらの経験を海外で積めることは、将来大きな財産になると思います。

#D230

電気・電子機器

派遣中 ▶ 2人
累計 ▶ 766人
分類 ▶ 鉱工業
活動例 ▶ 専門学校などで学生への電気・電子の講義と実習 など
類似職種 ▶ 電気・電子設備、電子工学 など

※人数は、2020年1月31日現在。



ロボットがどのような仕事ができるのか、どのような目的で使われるかを学生に指導する水野さん(右端)。ロボットを復元後、実習指導をするためにはコンベアー、搬送物などの周辺装置が必要だったが、購入には大学側の数多くの手続きが必要だったため購入を諦め、ダンボールを加工して周辺装置を製作し、代用した

PROFILE

1950年生まれ、静岡県出身。68年に静岡県立工業高校電気科を卒業し、現パナソニックを経て、商社に勤める。その後、地元静岡に戻り、金属加工会社で工場長として16年間勤務後、機械制御装置の会社を起業。2009年、電気・電子機器のシニア海外ボランティア(SV)としてザンビアの職業訓練校で活動した。11年に帰国後、元の事業を再開。16年より、SVとしてスリランカに派遣。18年9月の帰国後に事業を再開。

活動概要

職業訓練大学 (UNIVOTEC) のメカトロニクス学科に配属され以下の活動を行う。
●PLC (機械制御用マイクロコンピュータ)、およびアルディーノ (C言語による制御用マイクロコンピュータ) の基礎知識、操作方法を同僚および学生へ実習指導
●学生に与えられるプロジェクトの指導監督 など



水野勝二さん
(SV / スリランカ・2016年度2次隊)

Q 活動の最大の困難は?
ロボット復元後、授業を開始し、最初は多くの生徒が参加してくれましたが、回数を重ねるうちに出席率が悪くなりどうしたら良いか困りました。技術的な問題は自分自身の努力である程度解決すると思うのですが、教育の大変さを感じさせられました。

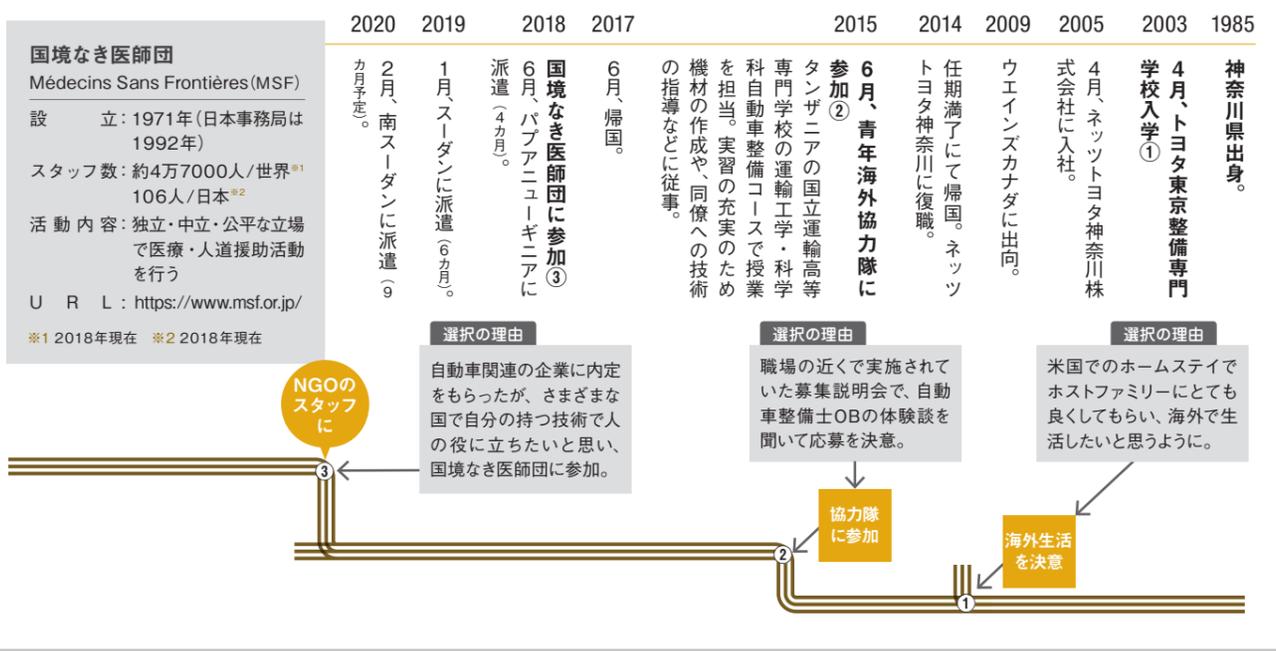
Q どう対応しましたか?
同僚に出席率を上げる方法を相談

Q 試みた解決策は?
週1回の会議と清掃活動は必須として開催し、清掃活動時は各部署のモニタリングや評価を行い、優秀部署に対して表彰を行うなど、モチベーション向上への取り組みを行いました。また、現地の人が使用している通話アプリでチームのグループをつくり、情報を共有。それでもどうしても、業務多忙で参加できない人が多くなることがあったので、新たなメンバーを勧誘して活動を進めていきました。継続的にこれらの促進活動を続けてきたことにより、2年目には5Sに対する意識は向上したと思います。

Q メインの活動は?
職業訓練大学において、自動制御技術 (主にPLC、産業用ロボットアーム) の実習指導として、学生に与えられるプロジェクト (各種自動制御装置の製作) の指導監督を行いました。配属後は、状況把握と活動内容の模索のため、同僚と話し合い、授業に同行し、大学に慣れることから始めました。約3カ月後、長期間放置されていた日本製の産業用ロボットを実習機材として使えるようにしてほしいと同僚に言われ、復元を試みましたが、バックアップの電池切れですべてのデータが消えてしまい、操作不能状態。途方に暮れてしまいました。特殊な電池であるため、スリランカでは手配ができず、シンガポールから取り寄せることになり、実際動かせる状態になるまでに3カ月程かかってしまいました。

Q 同職種の後輩隊員にメッセージをお願いします。
スリランカの公立学校の教育費は小学校から大学まで無料、授業は座学中心で、単位と無関係の実習には興味を持ちません。また、宗教的行事があり、星占いで人生や予定を決め、家族とのつながりも日常生活の中で重要視されているなど、学業よりも文化的な習慣が優先されるため、自分の描いていた活動目標、目的は十分に達成できずとはいえません。しかし、派遣国の人々との触れ合い、考え方、文化、風習、歴史、風景などをすべてが新鮮で、楽しく過ごせた2年間でした。活動の成果を上げることも大事かと思いますが、皆さんも派遣国の人たちと行動を共にし、彼らの考え方、文化を体験し共有してもらいたいと思います。健康、安全に気をつけ、楽しい派遣期間を過ごしてください。

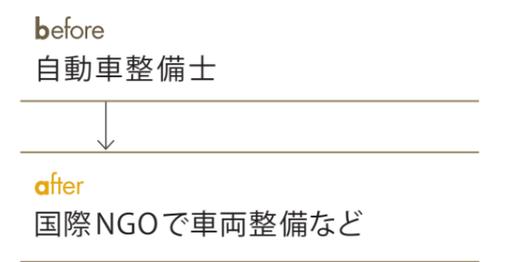
* PLC…機械制御用マイクロコンピュータ



国境なき医師団で派遣されたスーダンにて、地方プロジェクトで整備した車両の完成検査を行う川内さん。車両整備の業務以外に、運行記録や、車両のメンテナンススケジュールの管理、部品管理、ボートがある場合はその整備も行う。医療スタッフの活動先は電気がない場所や停電する場所が多いため、活動先に発電機が設置されており、その整備・点検も川内さんの仕事だ



before after 人生を変えた2年間



海外生活への憧れが芽生えたのは、「自動車整備専門学校時代のホームステイの経験」という川内さん。学校卒業後に日本の車販売店で自動車整備士として勤務し、カナダの店舗へ出向。その後、協力隊に参加した。タンザニアでの活動により、人の役に立てる仕事にやりがいを感じ、国境なき医師団に参加。現在は南スーダンで活動している。

海外勤務への憧れを現実に

早く自立がしたかった高校時代。進路を決める時期に手にした専門学校のパンフレットに「トヨタ」の文字を見つけ、「安定した職につけるだろう」と自動車整備士の専門学校に入学した。学校の選択授業で、消去法で選んだ米国へのホームステイプログラムが、川内さんのひとつの転機になる。初めての海外で優しいホストファミリーと出会い、楽しい3週間を過ごしたことで「こんな出会いがあるのなら海外で働こう」と心に決めた。

海外店舗のある自動車関連会社を探し、就職。自動車整備士として働き、3年目に社内試験を受け、カナダの店舗に出向。仕事と私生活のバランスがちょうど良く、同世代の仲間

国際NGOの活動を技術で支える

タンザニア・自動車整備・2015年度1次隊
 かわうちゆうき
川内勇希さん



タンザニアで実習の授業を行う川内さん。エンジンの制御をコンピュータをつないで確認している。自作したエンジン実習機は「自分でもいい出来だった」と川内さんは振り返る

た、エンジン内部の確認や、故障時の点検方法を実践的に学べる構造になっているエンジン実習機を思い出し、専門学校に連絡して写真を送ってもらい、それを元に自作。実習機を使って、不具合の症状から故障理由を見つけ出すという根拠のある修理方法を少しずつ教え、資料を残し、任期を終えた。

自分の技術を求める人のために

協力隊で教える立場になり「作業を着て現場で手を動かすのが合っている」と改めて気づいたという川内さん。帰国後、海外で自動車整備士として働ける仕事を求めていたとき、JICAが主催する企業交流会で国境なき医師団(MSF)のスタッフと話し、非医療系の車両整備という職種を知る。企業への就職かNGOでの活動か迷ったが、今やりたいことは何かを自分に問いかけた。

間もでき、充実した日々を過ごした。5年の任期を満了して日本に帰国し、復職した。日本での仕事は、基本的に整備や点検がメインだ。それが大事なことはわかっていながらも、故障車が多いカナダで試行錯誤しながら修理をしていた川内さんは、自分の技術を駆使して働きたいと思っていた。そんな折、電車で協力隊募集の吊り広告を見て、説明会に参加。自動車整備士OBから「日本では考えられない状態の車が走っている」と現地の様子を聞いたことで「どんな状態だ?」と興味を持ち、応募してみることに。合格し、タンザニアへの派遣が決まった。

配属先は生徒数が5000人を超える国立運輸高等専門学校で、その自動車整備コースの授業を川内さんは担当することになった。ところが、教科書も実習教材もない。先生が所有する資料を教科書とし、先生の車の内部を「見学」することで実習としていた。学生はエンジンの構造を知識として知っているが、修理どころか触ったことすらない。現地の車の修理がずさんなのも、整備士が修理方法を知らず、あてずっぽうで修理し、修理していくうちに壊してしまうためだった。川内さんは自身の専門学校時代に使用し

加したわけではなかったけれど、タンザニアで技術を教えるうち、それが現地の人の生活上向上につながればと思うようになりました。人の役に立つために自分の技術を生かしたいと思い、MSFへの参加を決めました」

書類選考と面接を経て、MSFの「緑の下の力持ち」と言われる職種・ロジスティックの車両整備スタッフに登録され、2カ国での活動を経て現在は南スーダンで活動中だ。業務内容は、現地事務所にある車両の整備と定期点検や、発電機の整備・点検、部品の管理などで、それらにより医療スタッフの移動や活動を支えている。加えて、現地雇用の運転手が簡単な車の故障に対応できるように技術指導も担当しており、「教えることに慣れたのは協力隊のおかげ」と川内さんは話す。

一方で協力隊では感じなかったプレッシャーもある。たとえば発電機で人工呼吸器の電気を賄っているとき、発電機の故障は命にかかわる。だがそのプレッシャーも含め「自分の技術が現地で求められ、それに答えられることにやりがいを感じる」そうだ。また、以前スーダンでの活動中に感じたことがある。「難民キャンプに行き、厳しい環境で暮らす大勢の人たちを目にしたとき、自分は『のほん』と生きていていいのかなって。自分の技術を使って、高い収入を求めるのではなく、人の役に立っていききたいと思いました」

南スーダンから帰国するのは11月。「いつか海外で自分の自動車整備工場を持ちたい」という思いと、「NGOに所属して活動し続けたい」という両方の希望がある。ただ今後どんな道を選んでも「人の役に立ちたい」という川内さんの気持ちは変わらない。

生活に役立つ技

あるもので日本の味

ナビゲーター = 松本やよいさん
(日系SV/ブラジル・料理・2018年度1次隊)

シュシュ(隼人瓜)の漬物のつくり方

日本ではあまり好まれません、ブラジルでは1年中「隼人瓜(シュシュ)」が山積みで売られています。値段も安く、庶民的な食べ物ようです。煮たり、サラダに盛り付けたりしていますが、どの料理も火を通して使われます。今日は、日本の「大根のサラダ漬け」のような、シュシュの漬物を紹介します。日系2世の方に教えてもらったものを、調味料を少し変え、アレンジしました。若い隊員にも日系の方たちにも好評です。



③ ②の袋を固く絞り、絞り汁を鍋に入れる。酢と砂糖を加え、火にかけて溶かし、調味液をつくる。

- 【材料】**
- シュシュ(隼人瓜) …1個(約500g)
 - 塩…大さじ1
 - 酢…大さじ2
 - 砂糖…大さじ1~1.5(好みで)



① 調味液が熱いうちに隼人瓜にかける。熱いうちにかけると、パリパリ感が増す。



② 隼人瓜は洗って皮をむき、縦のくぼみに切り目を入れて切り、種を取って食べやすい大きさに切る。ブラジルの隼人瓜は日本のものより2~3倍大きく、アクも少ないように感じます。



⑤ 全体に調味液がかぶるくらいに袋の空気を抜き、袋を縛る。冷蔵庫の中で約2時間保管して出来上がり。



② ポリ袋に入れ塩を振り、5時間位冷蔵庫で冷やす。急ぐときは1時間でも可。

知ったく情報

廃材でキノコ栽培

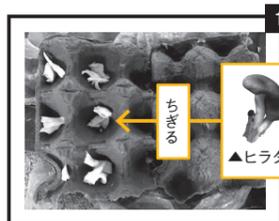
ナビゲーター = 竹崎 歩さん
(ザンビア・コミュニティ開発・2016年度4次隊)

段ボールで種菌をつくりヒラタケを育てる

ザンビアでは長年、乾期の現金収入獲得のために農家さんと隊員との間でキノコの菌床栽培が行われてきました。しかし、種菌の製造が複雑なため、大学から種菌を購入する手間がありました。何とか現地の資源を活用できないかと見つけ出したのが、段ボール種菌づくりです。段ボール素材であれば基本的に使用可能だと思うのですが、ザンビアではゴミになっていた卵トレイに目を付け、「ヒラタケ」を栽培しました。



④ 菌床(③の菌を育てる場所)をつくる。収穫後の大豆の殻や枝、稲わらか米のもみ殻などを麻布に入れ、その袋を水が入った鍋に浸し、湯を沸かし1時間茹でて滅菌。



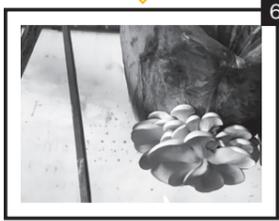
① 卵トレイとキノコを水につけ湿らす。キノコを適当にちぎり、破片をトレイの凹部分に置き、上からトレイで挟む。キノコ片が多いほうが菌糸のまわりが早い印象。



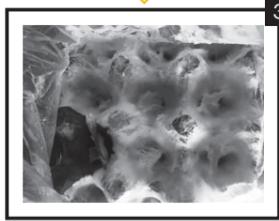
⑤ ④が冷めたら、ポリ袋に①→②→③と菌糸を挟むように入れる。米ぬかがあれば振りかける(なくてもOK)。②のように袋を閉じ、部屋の中にヒモで吊るす。湿度を保ちつつ、外部の菌が入らないよう注意。



② ポリ袋に入れて、口を開ける。隙間はない方が良いが、密封はしない程度の締め方をする。洗濯物を干すように部屋にヒモなどで吊るとよい。



⑥ 湿度と気温によるが、うまくいけば1~2カ月で写真のように発生。実際は乾燥や汚染によって失敗することもあります。ただ、作業は体力的にキツイものではないので、時間がある人はぜひ挑戦を。不明な点はご連絡ください(nznzytataa@msn.com)



③ 卵トレイが乾燥したら、水を少量、中に振りかけ湿度を保ってもよいが、なるべく外部から物が入らないほうが良い。遅くとも1カ月で菌糸が白くまわる。

活動に役立つアイデア

スマートフォンで動画づくり② — 撮影編 —

ナビゲーター = トランティ美佳さん
(コスタリカ・映像・2018年度1次隊)

撮影の5つのポイント

写真や動画を撮影するのに便利なスマートフォン(スマホ)。そのスマホで短い動画をつくるためのプチテクを、3つのテーマに分けて3回連続でご紹介します。ちょっとしたコツを抑えて、発表のツールとして使ってみてください。

動画づくりのポイント2回目は『撮影編』。スマホでの撮影を想定して、すぐに使えるプチテクをご紹介します。活動中に「いいシーンだなあ」と思う瞬間があれば、写真だけでなく、ぜひ動画でも記録してみてください。帰国後の活動紹介にきっと役立つと思います。

01 5秒は止まって撮る

撮影を始めると「あれも撮りたい!! これも撮りたい!!」と、カメラをあちこちに動かしてしまいがち。あとで映像を見てみると、結局大切な部分が撮れていないなんてことも。そこでポイント。

- ① 録画開始ボタンを押したら5秒はカメラを動かさずに撮影
 - ② カメラを動かすときはゆっくり 動きを止めたら5秒は動かずに撮影
 - ③ 録画を停止する前に5秒間カメラを動かさずに撮影
- ちょっと意識するだけで、落ち着いた映像が撮れます。

02 ズームを多用しない

遠くのもの撮るときに便利なズーム機能。でも実は、画像が荒れたり、手ブレが目立ったりとデメリットも。そこでズームを使わずに撮るための2つのポイント。

- ① 被写体にカメラを持った自分が近づく
 - ② 引き(被写体から離れた状態)で撮影
- のちの編集作業で被写体を切り取って拡大

遠くのもの撮るときは、できるだけ被写体にカメラを近づけるのがベスト。でも、どうしても近づけない場合は、ズームを使わず、そのまま引きで撮影し、編集で切り取って拡大した方が、画像の劣化を抑えられます。

03 縦撮り? 横撮り?

スマホ撮影で意識すると良いのが、スマホを縦にして撮影するか、横にして撮影するか。これはつくった映像を何を使って見るかによって変わります。

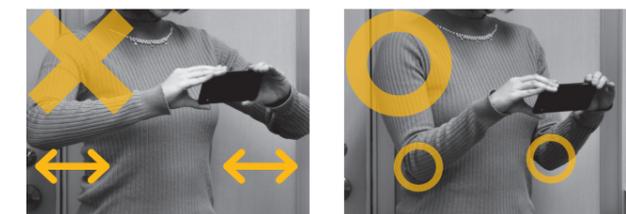
- ★縦撮り: スマホで見るための映像をつくる時
 - ★横撮り: パソコンやプロジェクターを使って見るための映像をつくる時
- スマホを除くと、テレビやパソコンなど多くのスクリーンは横長です。そのため動画を撮影する場合、横向きで撮影した方が汎用性の高い映像になります。

04 脳シメで手ブレ防止

撮影のときに注意したいのが手ブレ。画面が揺れていると、せっかくの内容が頭に入ってきません。そこで、スマホ撮影での手ブレ解消ポイント。

- ① スマホは両手で持つ
- ② 脳をシメる

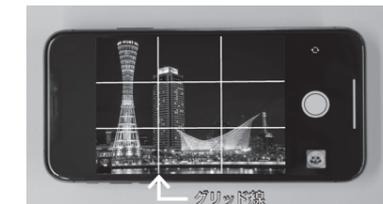
この2つを意識するだけでも、手ブレを防ぐことができます。



05 傾き大敵! 水平を意識してまっすぐ撮る

被写体を撮影することに集中するあまり、画面全体が斜めに傾いて見ると落ちて落ち着かない映像になってしまいます。それを防ぐために、カメラは地面に対して平行を保つように意識してみてください。ポイントは2つ。

- ① 背景に水平になるもの(天井・床など)を見つけ基準にする
- ② グリッド線機能を使ってスマホの角度を調整する



格子型に表示されているのがグリッド線。多くのスマホで表示できる機能がついています。

要注意! 動物はあなたを癒やすとは限らない!

これを読まれている方の中にどのくらい動物好きな方がいらっしゃるでしょうか。どのくらいの方が派遣国でペットを飼われていらっしゃるでしょうか。

日本では狂犬病予防法により、ペットへのワクチンを接種する義務が定められています。日本でのペットのワクチン接種はごく当たり前のことでも、海外ではそのような状況がありません。現地でも飼われているペットはワクチン接種がされていないことがほとんどです。

狂犬病ウイルスは狂犬病に感染している動物の唾液中に排出されますから、動物に咬まれた場合は感染の可能性があると云えます。日本国内では1957年以来、狂犬病の発生報告はありませんが、日本のように狂犬病の発生のない国は世界的にもごくわずかで、世界では毎年5万人以上の人が死亡しています。

また、狂犬病は犬や猫からだけでなく、哺乳類から感

染する病気です。「国立公園のサルやリスだから」「リゾート地での乗馬用の馬だから」「ホームステイ先の家畜やペットだから」と言って安全という保証はありません。

では、咬まれたらどうしたらよいでしょうか。狂犬病は有効な治療がいまだに確立されておらず、発症したらほぼ死に至ります。動物に咬まれる、引っ掻かれる、甘噛みされるなどした場合は、①流水や石けんを利用して十分に傷を洗い流しましょう。②24時間以内に医療機関を受診しましょう。③ご自身のワクチン接種歴によって異なりますが、ワクチン接種を受けましょう。多くの場合は咬まれた後のワクチン接種が必要になりますので、接種回数を医師に確認しましょう。

狂犬病への感染を予防するためには、動物に咬まれないようにする心がけが何よりも大事です。可愛いからとむやみに手を出してはいけません! お忘れなく!

いつ? どこ?

隊員関連イベント情報

JICAやその関連団体が主催・共催・後援などをするJICA海外協力隊関連のイベントをご紹介します。

3月15日 グリーンカレーづくり+応募相談会 JICA海外協力隊ナビ

佐賀

JICA海外協力隊経験者による活動報告会やワークショップ、ドキュメンタリー映画上映などを行っています。3月は「グリーンカレーづくり」ワークショップです。イベント後は応募相談会も実施。

- いつ? 3月15日(日) 10:00~12:30 (9:30開場)
- どこ? 佐賀県国際交流プラザ(佐賀県佐賀市)
- 詳細 「JICA九州」ウェブサイト内「イベント情報」をご覧ください。

3月7日 Our Actions For SDGs!

長野

JICA海外協力隊で国際協力の最前線へ!

2020年春募集に併せ、市民の皆さんを対象としたプログラムを開催。第1部では学校現場でのSDGsの取り組みを発表。第2部では教育関係の協力隊経験者による体験談と募集説明会が行われます。

- いつ? 3月7日(土) 13:00~17:30 (第1部は13:00~、第2部は15:40~)
- どこ? 長野市芸術館 アクトスペース(長野県長野市)
- 詳細 「JICA駒ヶ根」ウェブサイト内「イベント情報」をご覧ください。

4月25、26日 いろいろな未来が見えてくる 協力隊まつり2020

東京

JICA海外協力隊経験者による「協力隊まつり」が今年も開催。協力隊のOB・OG会や関連団体など約40団体が集合し、応募相談、活動・派遣国紹介、各国文化紹介、パネルトークなどを実施します。

- いつ? 4月25日(土)、26日(日) 10:00~17:00
- どこ? JICA市ヶ谷ビル(東京都新宿区)
- 詳細 <https://www.facebook.com/jocvfestival/>

3月14日 道産子ボランティアが 見てきた開発途上国

北海道

北海道出身・在住の青年海外協力隊、シニア海外協力隊の帰国報告会を実施します。帰国したばかりのJICA海外協力隊を招き、開発途上国での生活や活動を報告していただきます。

- いつ? 3月14日(土) 14:00~17:00 (13:30開場)
- どこ? 札幌国際プラザ3階 交流サロン(北海道札幌市)
- 詳細 「JICA北海道(札幌)」ウェブサイト内「イベント情報」をご覧ください。

第三回 全国OV教員・教育研究シンポジウムの開催

2019年12月22日、兵庫・神戸市のJICA関西センターで、『第三回 全国OV教員・教育研究シンポジウム~「協力隊を日本の文化にする」途上国経験をSDGs時代の日本の教育に活かす~』が開催されました。協力隊OB・OGや小林広幸JICA青年海外協力隊事務局長をはじめとするJICA関係者に加え、派遣予定の協力隊員など計140人が参加。シンポジウムでは、講演やテレビ会議、帰国後の実践発表、事前研修などが行われました。

講演では佐藤真久東京都市大学教授が登壇し、「途上国経験をSDGs時代の教育に活かす」をテーマに、協力隊に参加することでもたらされる「人間的な成長と豊かさ」を提示。テレビ会議では、現職教員特別参加制度を利用した派遣後半年の7人の隊員が話し合い、会場からの質問に答えました。

閉会後の交流会でも、参加者同士の意見交換が活発に行われるなど次回開催への期待の高さが伺われた同シンポジウム。4回目となる次回は、関東で開催予定です。



テレビ会議の様子。会場の参加者からは「各隊員の苦労と工夫を知ることができた」との感想があった

JICA海外協力隊への外務大臣感謝状授与式・懇談会を開催



代表あいさつをする梅谷さん

1月16日、帰国したJICA海外協力隊への外務大臣感謝状授与式が、東京・新宿区のJICA市ヶ谷ビルにおいて開催されました。授与式には、帰国したJICA海外協力隊64人が出席し、中谷真一外務大臣政務官から感謝状を授与されました。

来賓として北村誠吾衆議院議員、櫻田義孝衆議院議員(JICA議連)、松本剛明衆議院議員(JICA議連)、伊藤信太郎衆議院議員、羽田雄一郎参議院議員(JICA議連)、山田賢司衆議院議員(JICA議連)、井上一徳衆議院議員(JICA議連)、櫻井周衆議院議員(JICA議連)、本田顕子参議院議員(JICA議連)、また現職参加の帰国隊員の所属先代表者も参加されました。

授与式では、隊員代表として梅谷菜穂さん(ラオス・コミュニティ開発・2017年度3次隊)があいさつ。授与式に続いて行われた懇談会では、宮田瑠星さん(日系JV・ブラジル・野球・2017年度派遣)、大倉優枝さん(ザンビア・小学校教育・2017年度3次隊)が活動を報告しました。

*JICA議連…日本の国際協力 特に青年海外協力隊の活動を支援する国会議員の会

短期派遣2020年度第1回募集の応募受付開始

応募受付期間は、3月2日~23日です。詳しくは以下JICA海外協力隊ウェブサイトをご覧ください。

- ▶短期(一般案件)
<https://www.jica.go.jp/volunteer/application/short-seinen/>
- ▶短期(シニア案件)
<https://www.jica.go.jp/volunteer/application/short-senior/>

『世界日記』が全面リニューアル!

活動中の現役隊員が執筆するブログサイト『世界日記』が生まれ変わりました! スマホ対応、検索機能の強化、SNS連携、プロフィールページ拡充などなど、より魅力的で読みやすいサイトになりましたのでぜひご覧ください!

- ▶JICA海外協力隊の世界日記
<https://world-diary.jica.go.jp/>



2020年春募集(長期派遣)応募受付中

2020年春募集の応募を3月30日正午まで受付中です。技能や経験に応じて20歳から69歳まで、一般案件またはシニア案件への応募が可能です。

詳しくは、JICA海外協力隊ウェブサイト「募集情報」をご覧ください。

- ▶JICA海外協力隊ウェブサイト「募集情報」
<https://www.jica.go.jp/volunteer/application/>

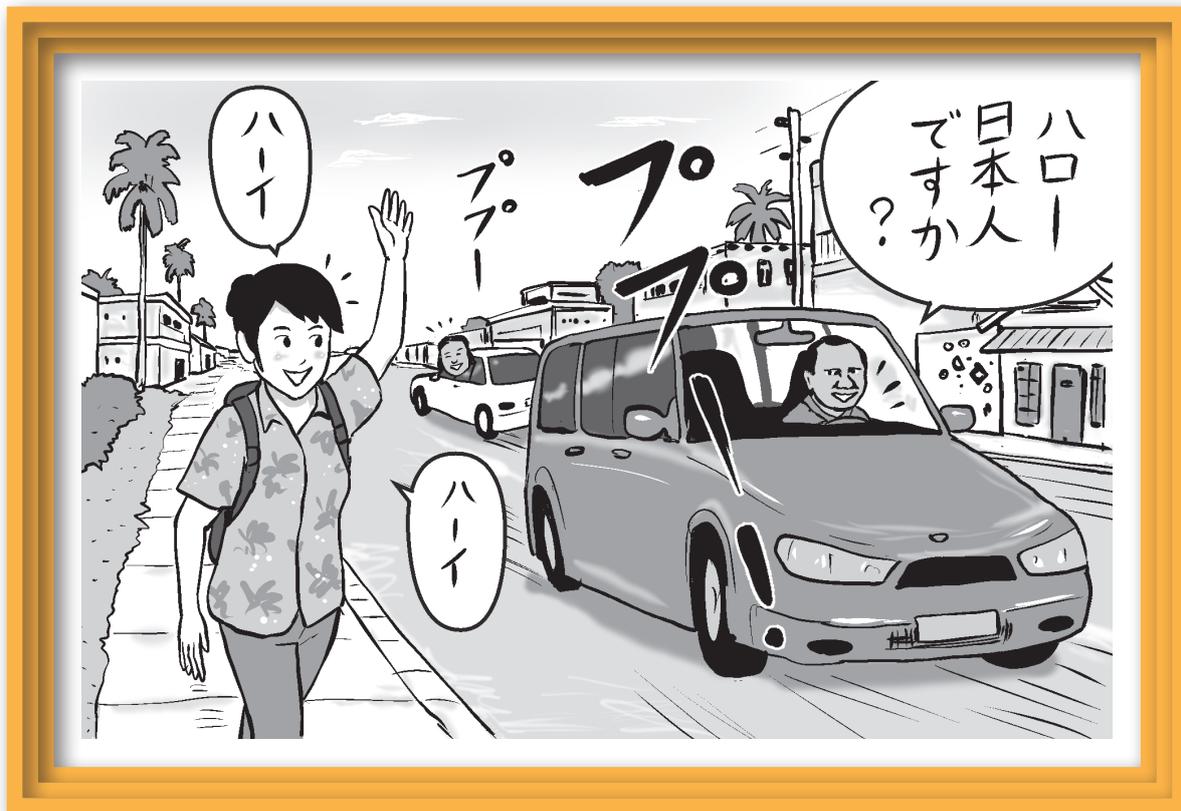
2017年度3次隊の帰国者数

2017年度3次隊の帰国者数は次の通りです。

2017年度3次隊帰国者数 (2019年12月1日~2020年1月31日帰国)	
青年海外協力隊	173人(46カ国)
シニア海外ボランティア	30人(18カ国)
日系社会青年ボランティア	17人(3カ国)
日系社会シニアボランティア	4人(2カ国)

つぶやき

お題 ▶ 現地化



イラスト=牧野良幸



今月の1枚

徒歩移動

私たち隊員の多くは移動手段が徒歩、現地の人の移動手段のメインは車だ。街を歩くと車の中から「ハロー、日本人ですか?」と必ず声をかけられ、「プー!」とクラクションを鳴らされる。この音には本当に毎回驚かされていた。しかし、徒歩での移動をして1年。今ではクラクションに「ハイ」と気軽にあいさつできるようになり、そんな車とのやりとりのおかげで移動時間があつという間に感じるこのごろ。

ペンネーム: 私の甥っ子1才 さん 協力隊員(大洋州・体育・2018年度派遣)

★季節外れとは言いますが

日中肌を刺すような日差しの毎日だった派遣国。いざ帰国時、「はて日本に着ていく服は」と考えた。日本はそのとき秋めく季節、さぞ寒いだらうと身構え着込むダウン。だがしかし。いざ日本に舞い降りると周囲は薄手、なんなら半袖でまだいけます感。あなただけよダウン感。ああ遠のいていた季節感。

ペンネーム: 羽毛レシーバー さん
協力隊経験者
(アフリカ・バレーボール・2017年度派遣)

★★今や好物

ココナッツ苦手だなぁ……だけどどんな場面でも出合ってしまうココナッツ。同僚とご飯食べても、通りがけにいただく料理でも毎日出合ってしまうココナッツ。気づけば毎日のように食べている。いつの間にか好きになり、マーケットでココナッツを手に入れている自分に驚きである。

ペンネーム: ココナッツ大好き さん
協力隊員(大洋州・看護師・2018年度派遣)

★★★あいさつでチュ

着任当初、企画調査員(ボランティア事業)さんから「職場(全32人いる!)でのあいさつは、全員に必ず行うように」と言われた。女性には自分と相手の右頬を接触させてキスをしなければならない。慣れない「チュ」が最初はイヤでイヤでたまらなかった。しかし、最近は数をこなして慣れ、仲間意識も芽生え、女性が右頬を出してくれるようになり、楽しみに変わった。帰国して妻にってしまうのが怖い!!

ペンネーム: 笹じい さん
SV(中南米・2018年度派遣)

募集中のお題

「ご褒美」「洗濯」「掃除」「朝ごはん」

投稿は『クロスロード』編集室まで
(P35をご覧ください)

あなたのつぶやきが
イラストになるかも!?



CROSS YELL!!
—先輩隊員からの置き土産—



当初は専門分野と異なる活動ばかりしていました。

さききひろの
文=佐々木 緩乃さん

- ▶東ティモール
- ▶公衆衛生
- ▶2017年度3次隊

PROFILE

1990年生まれ、新潟県出身。看護師として大学病院の小児科・小児外科病棟に3年間勤務。2018年1月、協力隊員として東ティモールに赴任。20年1月に帰国。

活動概要

東ティモール赤十字社(ティリ県ティリ)の青少年部に配属され、主に以下の活動に従事。

- 青少年のリーダーシップ育成を目的とした事業の改善支援(保健衛生教育の評価など)
- 障害者のインクルーシブ促進支援(地域におけるワークショップやイベントの企画・実施など)

私の配属先は、防災や救急法、衛生教育など幅広い事柄を学び、実践する環境と機会を青少年に提供する事業を行っている団体でした。着任当初に同僚たちからお願ひされたことは、「事業運営へのアドバイス」。私は学校保健や地域保健に看護師として携わった経験はありましたが、それらの事業の「運営」にはかかわっていませんでした。そのため、同僚たちの要望に応えられず人間関係が悪化するのではないか、何も活動ができないのではないかと、しばらくは不安と焦燥に駆られる日々でした。

しかし、私にもできることはあるのではないかと、私の経歴と同僚のニーズが合致する分野があるのではないかと思い直し、専門性にとらわれず、とりあえずできそうなことをやってみるようになりました。そうして、「エクセルの使い方講座」や「保健ワークショップ」など「できること」の枠を広げていくと、そのなかに「同僚たちのニーズ」とマッチするものも出てきて、一緒に仕事ができるようになっていきました。

そうすると、同僚たちの課題も見えてくるようになります。彼らは経験や技術はあるものの、「事業評価」に強い苦手意識を持っていました。そのため、事業の計画、実施、評価のうち、評価だけはやろうとせず、外国人ボランティアに仕事を回していたのでした。私は彼らの「できない」という意識を変えるため、「できていること」を言葉にして伝えるようになりました。そうして「できていること」を認め、明確化することで、彼らは自身の

仕事に自信を持つようになり、事業評価への取り組みに前向きな発言が聞かれるようになりました。彼らは最終的に、自ら新たな事業評価の予算案や活動計画案を作成。小さな変化ですが、彼らの行動が変わるきっかけになれたのかなと思えた瞬間でした。

私自身にも「できないこと」はたくさんありましたが、専門性にとらわれずに「できること」を積み重ね、同僚たちとそれを分かち合ったことで、貴重な2年間になったと思います。

「YELL!!」
「できないこと」より
「できること」に目を向けて

「できないこと」に目が向きがちな協力隊活動ですが、からなず「できること」があるはず。それに気づき、自分自身と仲間たちの両方に伝えていくと、モチベーションを保って活動できるのかなと思います。



事業評価に取り組んだ同僚たちと佐々木さん(左から2人目)



今月号の表紙
ウガンダ



こはたたくま
文=小幡卓真さん
(理科教育・2016年度3次隊)

私は村落部の中等学校で理科教育隊員として活動しました。任期中、普段は別々の任地で活動していた同期の理科教育隊員2人とともに、それぞれの任地を回って理科の観察や実験を紹介する「サイエンスフェスティバル」を開催しました。表紙の写真は、記念すべき第一回のときのものです。「シャボン玉ブース」を担当した私が生徒たちと大きなシャボン玉をつくる様子です。観察や実験で生徒が得る驚きと感動が見事に表れた瞬間だったと思います。